

日本フランス語フランス文学会東北支部会報 第13号

目次

【シンポジウム報告】 フランス語教育の今、これから

p.1

深井陽介, 西山教行, 小松祐子、茂木良治、今中寿衣子、Bertrand Sauzedde

【論支】

レミ・ド・グールモンの『シクスティーヌ』再読 ―心理学の疾病研究の活用法を手がかりに―

p.14

今田 陽祐

対話関係の構築と解体

―コミュニケーションにおける人称表現の機能―

p.31

牧 彩花

編集後記 p.44 投稿規定 p.45

日本フランス語フランス文学会 東北支部

2020

フランス語教育の今、これから

深井 陽介

近年のグローバル化に伴い、外国語教育は大きな転換点を迎えている. 社会状況の変化に応じて、フランス語教育で扱う内容や授業の方法などについても根本的に見直すことが求められている. 例えば、従来のパリを頂点とするフランス文明を中心に学ぶためのフランス語や、文法学習・訳読を中心としたフランス語学習のみでは、現代社会を生きる上で必要な多様性や、複眼的な視点を育むことはできないように思われる. その一方で、日本においてフランス語の授業を行っている教員は、必ずしもフランス語教育の専門家ではなく、具体的に何を教えればいいのかイメージしにくい場合も多いだろう. 従って、まずはフランス語教育を取り巻く現況を把握した上で、情報や問題を共有することが重要になる.

このような問題意識から、2019年11月30日の日本フランス語フランス文学会東北支部大会(東北大学)において、シンポジウム「フランス語教育の今・これから」を開催し、西山教行(京都大学)、小松祐子(お茶の水女子大学)、茂木良治(南山大学)、今中舞衣子(大阪産業大学)、ベルトラン・ソゼド(東北大学)の各氏にご発表頂き、コーディネーターは深井陽介が務めた。当日は非常に多くの学会員や外部の方々にご参加頂き、有意義で活発な議論がなされた。この場を借りて心より御礼申し上げる。

この本シンポジウムは政治・社会などのマクロな視点の考察に始まり、最終的には具体的な授業の方法などミクロな視点へと向かっていった。まず、西山氏がフランス語を言語政策の観点から考察し、次に小松氏が最近注目を浴びているフランス語圏 (フランコフォニー) とフランス語教育の未来について発表した。また、茂木氏は制度としてのフランス語教育に注目し、中等教育・高等教育におけるフランス語教育の現状と課題について検討した。シンポジウム後半は、今中氏がフランス語の授業デザインに関して発表した後、ソゼド氏が音声学を中心としたフランス語の授業方法について発表し締めくくった。

以下、シンポジウムのまとめとして、各発表の内容を簡潔に報告する.

(東北大学)

フランス語教育と言語政策

西山教行

本報告では「フランス語教育」を言語政策の観点から検討し、「フランス語教育」の射程を考察した.

「フランス語教育」は一義的には教室で学習者にフランス語を教授することを意味し、この意味での「フランス語教育」を専門とする教員は日本国内に 1000 名以上いると思われる.しかし狭義の「フランス語教育」に関連する研究論文を執筆する研究者は限られており、「フランス語教育を専門とする」という言説には多義性がある.「フランス語教育」実践者の人数と、「フランス語教育」の理論そのものに関心を持つ研究者や実践を理論化する研究者の人数は対応するものではない.これは日本フランス語教育学会構成員のプロフィールにも如実に表れており、会員の多くは「フランス語教育」に関する専門論文を書くことがなくとも、学会に加入し、「フランス語教育」に関わる情報収集や交流に意義を認めている.

次に言語教育の構造を考えてみたい. 言語教育とは教師と学習者, 教材によって構成されると共に, それらを取り巻く環境もまた構成要素の一部となっている. このような観点に立てば,「フランス語教育」とは,まず教師が関わる教授法がその構造の一部を構成しており,これは文法翻訳法から始まり,近年の行動中心アプローチや神経言語学アプローチなど,さらに複言語教育など教授法は日々新たな展開を遂げている。日本におけるフランス語教育の活動はこの領域で極めて活発で,Journée pédagogique de Dokkyo や Rencontres pédagogiques du Kansai を開催するなど,フランス語教師は教授法の改善に積極的に取り組んできた。

学習者が主体となる言語習得や学習もまた外国語教育学の重要な研究対象である.言語習得の課題は、アメリカ起源の第二言語習得のように英語圏での研究成果が著しいものの、バイリンガリズム研究のようにフランス語圏での研究も進展しつつある。またフランス起源の自律学習などの分野はとりわけパソコンの著しい発展の恩恵を受け、さまざまな自律学習教材が開発され、教室の内外で学習者が教師の介入なくとも外国語を学習することができるようになっている.

教材の選択は、教育の対象となる言語文化の決定を意味することから、外国語教育ならびにその研究を構成する不可欠の要素である。文法や音声といったフランス語そのものについては言語学や社会言語学などの知見が参照項目に入るであろうし、また文化については近年ではとりわけフランコフォニーの社会文化への関心が高まり、いくつかの教材も開発されている。フランコフォニーをフランス語教育に導入することは、フランス語の相対化を計り、フランス語がフランス以外の国や地域で広く使用されていることを訴えることにつながり、フランス語の実用性を可視化することにも役立つ。

教師,学習者,教材の三項目を支える下部構造である社会や文化といった環境 との関係もまたフランス語教育が介入すべき分野である。ヨーロッパ人へのフ ランス語教育と,日本人へのフランス語教育は必ずしも同じ価値を持たず,母語 や文化,動機などの環境を考慮に入れる必要がある。

言語政策の観点から重要な事項はこの構造のなかでも言語教育のトリロジーを支える環境であり、これは教室から始まり、学校、地域、地方自治体、さらには国や国際社会にいたるまで展開する。また教育を巡る環境の展開は歴史的次元においても考察の対象となる。つまり日本のフランス語教育については、これまでどのような歴史的経緯を経てフランス語教育が存続してきたのかを振り返り、それを分析することもフランス語教育研究の使命の一つである。

これに加えて教師の育成や研修も優れた言語教育を実現するためには不可欠であり、日本フランス語教育学会ではスタージュや Journée pédagogique de la langue française などの実施を通じて関わっている.

人口減少社会において、今後のフランス語教育は学生数の全般的減少が不可避であるだけに、展望を示すことが容易ではない。学生数のみならず、教員そのものの減少、研究者を志望する学生が飛躍的に少なくなっていることから、われわれはフランス語教育存続の危機へと向かっている。その上で、あえて展望を模索することができるならば、フランス語教育を専門職として確立するため教員一人一人が研修などを通じて教授法の改善に取り組み、難しいながらもフランス語学習の魅力を伝えること、および専門の講義科目などを持つ機会がある場合、フランス語教育との連動を念頭に、講義を通じてフランス語・文化などへの関心を高める工夫が必要となるだろう。現在定職にある教員がそれに安住することなく、次の世代への架け橋となるよう知恵と勇気を振り絞る必要がある。

(京都大学)

フランス語教育の社会文化的コンテンツについて ——フランコフォニーの視点から——

小松祐子

フランス語教育においては、過去にはフランス語をフランスの言語と位置づけ、言語学習のコンテンツとしてもフランスの社会文化事象を紹介する伝統が存在した.しかし、現在3億人とされるフランス語話者の大多数はフランス人以外である(OIF, 2019).近年では、フランス語が世界で広く共有される言語であり多様な文化を擁すること(つまりはフランコフォニー)が、フランス語学習の魅力として強調されるようになっている.そこで本報告では、フランス語教育の社会文化的コンテンツについて、フランコフォニーの視点から、過去と現在を概観し、将来への方向性を検討する.

まず確認しておきたいのは、言語学習において言語的要素と文化的要素とをあわせて学ぶことは欠かせないということである。欧州言語共通参照枠においても、connaissances du monde (connaissances générales)と connaissances socio-culturelles が言語活動やタスクの実行に不可欠なものであることが明記されている(CECR, p.82、日本語版 pp.107-108)。前者(一般的知識)については、「ある言語を学習しようとする者にとって特に重要なのは、その言語が話されている国の事実に関する知識、例えば、その国の重要な地理的、環境的、人口学的、経済的、そして政治的な点に関する知識である」とし、また後者(社会文化的知識)については、「言語学習者にとって、この分野の知識は特別注目に値するほど重要である。というのも、学習する言語が話されている地域の社会的・文化的知識というのは、他の知識とは違い、学習者にとって今まで経験によって得る機会のなかった知識である可能性が高く、ステレオタイプなどで歪んでいる可能性があるからである」としてその重要性を強調している。

では、学習者がフランス語を「世界言語 langue monde」として学び用いるためには、どのような一般的知識、社会文化的知識が必要だろうか。現在の課題と今後の方向性を見極めるために、まずは過去のフランス語教科書について振り返りたい(世界的に使用されている代表的な FLE 教科書を対象とする)。20世紀後半に世界中でもっとも多くの学習者に用いられたとされる *Cours de*

langue et de civilisation françaises (Mauger Bleu) (Hachette, 1953)では、扉ページにエッフェル塔、セーヌ川、凱旋門を俯瞰する写真があしらわれていることが象徴するように、パリを頂点としたフランス文明を伝えることをその前提としていた。SGAV 教授法の代表的教科書 Voix et image de France (Didier, 1962)もパリのブルジョワ階級を登場人物とし、社会文化的コンテンツの範囲は限られていた。この傾向に変化が見られたのが、コミュニカティブアプローチの先駆とされる C'est le printemps (CLE international, 1976)においてであり、そこには当時の5月革命を経たフランス社会の変化が反映され、ヒッピー文化、ヒッチハイク、ストライキ、移民労働者などが紹介された。コミュニカティブアプローチの教科書には、20世紀後半に発展した社会言語学、文化人類学、異文化コミュニケーション研究の成果が活かされるようになったとされるが、教科書で扱われる事象はフランス本国のものにほぼ限られていた。

フランス語教科書のコンテンツが広くフランス以外に開かれていったのは 21 世紀に入ってからのことである. 2000 年ごろから, 世界のフランス語圏の地図が, それまでのフランス地図に加えて掲載されるようになる. さらに 2006 年以降出版されたいくつかの教科書では, 積極的にフランコフォニーを紹介しようとする動きが確認されるようになった. *Alter-ego 1* (Hachette, 2006), *Alors ? 1* (Didier, 2007), *Latitudes 1* (Didier, 2008)では, ブリュッセル, モンレアルなどフランス以外の代表的なフランス語圏都市や, フランコフォニー国際組織 (OIF) を紹介するページなどが見られる.

最近の教科書ではフランコフォニーに関するコンテンツがさらに充実している. Saison 1 (Didier, 2015), Défi 1 (Maison des langues, 2017), Cosmopolite 1 (Hachette, 2018)では、Leçon 0 からすでに、フランス語世界へのイニシエーションとしてさまざまな地域のモニュメント、料理、有名人などが紹介され、その多様性が強調されている。その後も、比較的知名度の低い地域(たとえばアオスタ渓谷やアカディー)や文化(アフリカの美術館、女性文学など)が随所に取り上げられる。さらにはベトナムを旅するモロッコ人、ケベックを旅するフランス人といったフランス語圏内の比較の視点までもが扱われているのが興味深い(Défi 1, p.128)。現代の行動志向型(アクショネル)教授法で重要とされるタスクについても、フランス語圏のエコツーリズムなどがテーマとされている。これらの教科書を使用すれば、豊富な視覚資料にも助けられ、学習者は学習初期からフランス語世界の多様性に親しむことができるだろう。

ただし、留意すべきことがいくつかある。まず挙げられるのが、ステレオタイプの危険である。上掲の CECR においても学習者のもつステレオタイプについて言及されていたが、教科書には依然としてステレオタイプ的なフランコフォニーの表象が確認され、学習者のそれを助長する危険を指摘できるだろう。Defays (2003, p.67)はステレオタイプに対する批判的意識が重要であることを強調しており、教科書の内容を鵜呑みにせず考えさせる指導が必要である。

もう一つ挙げられるのが、フランス語の言語的多様性、つまり語彙や表現、発音の地域的な特徴についてはこれらの教科書ではほとんど扱われていないということである。初級段階において学習者に「標準フランス語」を示すことは重要である。しかし中級以上では言語的多様性を無視するわけにはいかないだろう。多様な文化はそのまま言語にも反映されるものだからである。

最後に、ここに挙げた代表的教科書のもつ意味を考える必要がある. 日本での教科書出版とは異なり、フランスの FLE 出版社は同時に何種類もの教科書を売り出すことはしない. 1 冊の教科書を比較的長期にわたり広く世界的に普及させることを目指し開発しており、そこには教授法や教育理念の一般的な変遷が反映されている. またこれらの教科書によって最新の教授法が世界的に普及するという影響もある. したがって、これらの教科書の動向は世界的なフランス語教育の傾向と一致していると考えてよいのではないだろうか.

つまり、今日のフランス語教育においては、フランス語を通じて広く多様なフランコフォニーの文化を知ることが重要であり、またそれがフランス語学習の魅力となると考えられるのである。フランス語を学ぶことは、単なるスキルの習得にとどまらず、また懐古趣味の嗜みでもなく、多様性・多元性への理解、多文化共生という現代のグローバル化社会において求められる重要な学習につながる可能性をもつのである。「今」そして「これから」のフランス語教育の方向性として、私たち教員はこのことをしっかり認識していく必要があるだろう。

(お茶の水女子大学)

【参考文献】

Conseil de l'Europe, Cadre européen commun de référence pour les langues : apprendre, enseigner, évaluer (CECR), 2001.

Defays, J.-M., Le français langue étrangère et seconde, Bruxelles : Mardaga, 2003.

Organisation Internationale de la Francophonie, *La langue française dans le monde*, Collection La Bibliothèque Gallimard, Hors série, Gallimard, 2019.

中等教育・高等教育におけるフランス語教育の現状と課題

茂木 良治

本発表では、中等教育・高等教育におけるフランス語教育の現状について考察し、制度的な面やカリキュラム面でどのような課題があるか検討した.

まず、文部科学省より公表されている「平成 29 年度 高等学校等における国際交流の状況について」を参照しながら、中等教育におけるフランス語教育の現状を探った。この報告書によると、平成 29 年度時点で、フランス語を科目として設置している学校数は 201 校 (フランス語を学んでいる生徒数は 6782 人)であり、平成 19 年度の 268 校をピークに減少傾向にある。約 10 年で、60 校以上の学校がフランス語教育を止めていることからもわかるように、フランス語は科目として不安定な状況にあることがわかる。実際に、教育現場からも様々な問題が報告されている。例えば、「フランス語」に特化した学習指導要領は存在せず、第二外国語としてフランス語を学ぶ教育目標が明示されていないため、学校によって授業時間数、指導内容も多種多様なものとなり、各学校の授業目標が共有されていない。そのため、高大連携が難しい状況となっている。しかしながら、このような難しい状況の中、日仏の交換留学であるコリブリ(Colibri)などの国際交流活動やコンクールを通して、生徒たちにフランスおよびフランス語圏の魅力を伝える活動が盛んに行われている。

次に、高等教育におけるフランス語教育の現状を示す資料として、日本フランス語フランス文学会と日本フランス語教育学会が共同で実施した「フランス語教育実情調査」がある、この調査によると、2012年の時点では、501大学、358短期大学、56高専がフランス語を科目として開講している。このアンケート調査の結果では、教師側の教育目標と学生側の希望する学習目標の間に乖離が見られている。教師側は「教養としてのフランス語」、「文献を読むための基礎的な能力」を教育目標として掲げており、フランス語で書かれたテキストを読み解く語彙・文法力を身につけることに主眼を置いている。それに対して、学生側は「日常会話が話せるようになりたい」「フランス語でコミュニケーションがとれるようになりたい」というような希望を抱いており、コミュニケーションツールとしてのフランス語を身につけたいと考えている。このような目標の乖離は、教

師の提供する授業内容と学生の求める内容の間の隔たりを生むことになり、学生のモチベーションの低下を招く恐れがある.必ずしも学生の希望にすべて合わせることはないと思うが、教師側からの歩み寄りは必要であろう.

ここまで中等教育・高等教育の現状を見てきて浮き彫りになる課題として、どちらも教育(学習)目標が曖昧であり、統一的な目標設定が必要であることが挙げられる。この解決策として、近年、日本の外国語教育に多大な影響を与え、英語教育においても到達度目標として採用されている CEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠)に依拠することが考えられるだろう。 CEFR は 6 段階のレベル (A1,A2,B1,B2,C1,C2)を設定しており、学習者が外国語を使って具体的に何ができるようになるのかを示す例示的能力指標を提示している。例えば、「A1 レベル・聞くこと」であれば、「はっきりとゆっくりと話してもらえれば、自分、家族、すぐ周りの具体的なものに関する聞き慣れた語やごく基本的な表現を聞き取れる」という具体的な指標が提示されている。 A1 レベルを目指すのであれば、学習者がこの指標を達成できるカリキュラムや授業を展開することになる。

これまでのフランス語教育では、「教師は何を教えたいか」という視点からカリキュラムが構築されていたが、CEFR の影響もあり、今後はフランス語の授業を通して「学習者がフランス語で何ができるようになるか」という視点へとシフトすることが求められ、学習者中心のカリキュラム構築が必要となるだろう。そのためにも、フランス語教師は学習者のニーズに合った授業を提供できるようなカリキュラムデザインや教授法などを身に付け、多様な学習目標に対応できるようにしておく必要があるだろう。

(南山大学)

【参考文献】

Conseil de l'Europe. (2001) Cadre européen commun de référence pour les langues : apprendre, enseigner, évaluer. Strasbourg : Conseil de l'Europe. (吉島茂・大橋理枝訳・編『外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠』朝日出版社, 2004 年)

日本フランス語フランス文学会・日本フランス語教育学会(2012)『フランス語教育実情調査』http://www.sjllf.org/jowi9bu3j-

261/?action=common_download_main&upload_id=818

フランス語の学習指針研究会 (2018)『フランス語の学習指針 (ver. 0.1)』

フランス語の授業デザイン

今中 舞衣子

本発表では、授業デザインの視点からフランス語教育のこれからを論じた.

発表者はこれまで、「ワークショップのデザインとファシリテーション」、「サービスラーニングにおけるリフレクションと学習活動デザイン」、「フランス語教員の視点を生かした初年次教育のデザイン」など、「デザイン」という言葉を含んだ研究を多く発表してきたが、授業デザインについて研究していると言うと、教師が特定の学習方法を学生に強制するようなイメージを持たれ反論を受けることも多かった。しかし、デザインは常に人、モノ、環境との相互の関係性を含む概念であり、デザインする側が一方的に他者を変えるためのものではない。本発表ではそれを前提としたうえで、授業デザインの諸要素のうち空間、道具、活動の3つについて、フランス語の授業における具体例をもとに紹介した。

1 つめの空間のデザインは、授業における学習環境を考える、と言いかえることもできる. ここでは、スクール型、劇場型、アイランド型、長方形型、サークル型などさまざまな教室のレイアウトを検討し、異なる環境における視線の違いなどに着目しながら、空間の設計/選択の目的について考察した. そのうえで、共同注視を促進するのか、ペアワークやグループワークを促進するのか、個人作業を促進するのか、可動性や可変性が必要かなど、授業の目的に応じた空間のデザインが必要であることを確認した.

2つめの道具のデザインは、授業におけるモノとの関係を考える、ということである。アフォーダンス(環境の様々な要素が人や動物などに働きかけ、フィードバックによって意味や作用が生まれる)という概念から道具の役割をとらえてみると、どのようなモノがどのような場面で用いられるかによって、学びのプロセスに変化が生じると考えられる。例えば、インフォメーションギャップカードやサイコロ、トーキングスティックなどが用いられることで学習者間のコミュニケーションが促進されたり、ワークシートやリフレクションシートが用いられることで学習プロセスが可視化され新たな気づきがもたらされたりする。本発表では、こうした観点をもとに発見型学習型教材として開発した、フランス語教科書『アクティヴ!』シリーズの事例を紹介した。

3 つめの活動のデザインは、授業における対人関係を考えることともいえる. 例えば授業を始める際にチェックインやアイスブレイクと呼ばれるような活動をとりいれることは、授業の雰囲気を良くするだけでなく、その後の学習や言語活動をスムーズに行うために有効な方法である. また、授業に学生の自己表現を促す活動をとりいれたり、シンク・ペア・シェア、インタビューの輪、ジグソーなどの協同的な活動をとりいれたりすることで、学生が参加意識や当事者意識を感じられる場づくり、深い学習に向かうための足場かけを行うことができる.

以上のように、授業デザインの諸要素(空間,道具,活動)を考えるにあたっては、授業の目的は何で、その達成のためには教室において具体的にどのような言語活動を想定するのか、という視点が重要になってくる.

本発表では結びにかえて、これからのフランス語教育における学習と評価のマルチモーダル化について述べた。今後は文字だけ/音声だけでフランス語を伝える行為や、紙の辞書だけでテキストを理解する行為にとどまらず、ヴィジュアルイメージの理解や表現、教室内外におけるICTの活用がますます重視されるようになるだろう。フランス語を学ぶことが他のさまざまな学びの可能性と結びついていく、という展開に、今後のフランス語教育の可能性を感じている。

(大阪産業大学)

【参考文献】

今中舞衣子 (2017)「コミュニティへの関わり方とあり方を問う――当事者意識とアイデンティティ」『キャリアデザインのための自己表現――過去・現在・未来を結ぶバイオグラフィ』細川英雄,太田裕子 (編著) 東京図書, pp. 167-181.

今中舞衣子,中條健志(2020)『アクティヴ!1』,『アクティヴ!2』,白水社. 佐々木正人(2015)『アフォーダンス』岩波書店.

ジョンソン, D.W., ジョンソン, R.T., ホルベック, E.J. (2010) 『学習の輪――学 び合いの協同教育入門』 二瓶社.

美馬のゆり、山内祐平(2005)『「未来の学び」をデザインする——空間・活動・ 共同体』東京大学出版会.

フランス語学習者の中間言語のリズムの分析について

Bertrand SAUZEDDE

伝統的に、すべての言語は音節拍リズムか強勢拍リズムに分類されている (Pike 1945, Abercrombie 1967). 英語のように強勢拍リズムを持つ言語は、強勢アクセントから次の強勢アクセントまでの時間が等間隔である.

その一方で、イタリア語、スペイン語、フランス語などは音節リズムをもつ言語であるため、音節から音節までが一区切りとなる。日本語もまたフランス語のように音節拍リズムの言語に分類されるが、日本語の等時的単位は音節より小さく、1字分の長さに相当するモーラである。日本語の音節と比較すると、フランス語の音節はオンセット(母音の前の子音)とライム(母音とその後の音)に分かれているため、より複雑な構造をもっている。そのため、複雑な音節構造に慣れていない日本人学習者は、フランス語のリズムに対して問題を抱えている傾向にある。

第二言語の学習者が目標言語を習得する時,中間言語の過程を通る.この中間言語は当然目標言語と母語の両者の影響を受ける.音声学の観点から見ると中間言語とともに第二言語は中間音韻論のプロセスを通じて進化する.この場合,音節拍リズムと強制拍リズムのみに大別することが効果的ではないことが明らかになる.従って,本発表では学習者の中間言語はどのように分類できるのかを考察し,発話リズムを示す韻律変数を通じて,どのように細かく学習者のリズムを分析することができるかを検討した.

音節という観点から日本語の音声を考えると、日本語は軽音節と重音節に分かれている. 軽音節は1モーラに相当し、基本的にひらがな1文字に対応するが、そうではないものを「特殊音節」という. 特殊音節には「拗音」「促音」「長音」「撥音」の4つとその組み合わせがある. 重音節は他の音節よりも時間的に長く発音され、2モーラに相当する. 日本語の音節構造において、V(母音単独)とCV(子音1つと母音1つ)の割合は90%以上である. しかし、フランス語の音節はより複雑な構造をもっており、オンセット(母音の前の子音)とライム(母音とその後の音)に分かれている.

日本語を母語とするフランス語学習者は、フランス語の語句を発音する際、

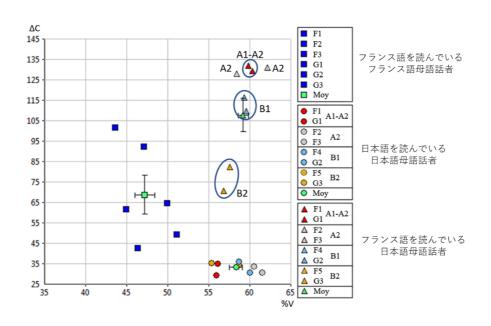
日本語の音節構造に基づいて発音し、フランス語の音節構造を単純化してしまうことがある。音節を単純化するためには、二つの方法がある。最も使用される方法は母音挿入である。例えば《restaurant》という3音節の単語は [ke/su/to/ka/n]と5音節に区切って発音される傾向にある。なぜなら、その音節の区切り方が母語の表音システム、即ち「レストラン」に近いからである。この現象は、複雑な音節構造を持つ外来語を日本語に借入する場合に一貫して起こる。母音挿入をすると、たとえ発音が正しくなくとも、聞き手は正しく理解することができる。一方、子音連結など音節構造が難しすぎる場合、学習者は子音削除を行うことがあるが、聞き手は正しく理解できないことが多い。従って、自然に話すためには母音の発音だけでなく、音節構造、リズムなどを習得する必要があることが分かる。この問題に関する研究は存在するが、学習者のレベルによって、この現象がどう進化していくのかはほとんど分析されていない。

伝統的にすべての言語は音節拍リズムか強勢拍リズムに分類されてきたが、それに入らない言語もある為、研究者が新たなアプローチをとり始めた。その結果、(%V (母音の時間長)、 ΔC (子音の時間長の標準偏差)の大域的変数を用いて、ネイティヴスピーカーが話す言語のリズムの特徴をさらに綿密に分析できるようになった。すると、言語が二つのリズムグループのみに分類することができず、リズムの連続体に配置されていることが分かった。

言語のリズムに関する研究を確認すると、ネイティヴスピーカーの言語の特徴を紹介する論文が多い.しかし、第2言語の中間言語のリズムの研究はまだ珍しい.実際.大学で使用できるフランス語音声に関する教科書はほとんどないと言っても過言ではない.第2言語を学習する時、中間言語のリズムはどう分類すればいいだろうか? 初級レベルの学習者が目標言語のリズムを真似しても当然母語の影響を受けるが、学習者のレベルが上達するにつれ、リズムはどう進化するのだろうか? 本発表ではこの問題を深く考察した.

具体的には、まずフランス語と日本語の音節構造の差異を提示した上で比較対照した.次に、どのような場合に「音挿入」と「子音削除」が現れるのかを明らかにするため、学習者による音読を録音し、音声データの分析を行った。その結果、音節構造の変化がプロソディーやリズムという超分節音素に悪影響を及ぼすことが分かった。特に、学習者が正しく音節に区切ることが出来ない場合、無音ポーズが生じ、文章全体のプロソディーがフランス語母語話者のものと大きく異なることが分かった。

更に、学習者とフランス語母語話者の発話を比較して大域的変数(%V (母音の時間長)、ΔC (子音の時間長の標準偏差)を抽出した.



学習者がフランス語を読んでいると、母音挿入と子音削除を行うため、%Vが高くなるという結果が明らかになったが、初級レベルから中級レベルまでの中間言語の差異が分かりづらい。なぜなら、外国語でテキストを読むと話者のリズムが遅くなり、当然母音の長さにも影響を及ぼす副作用があるからである。従って、(%Vおよび ΔC の分析だけではリズムの変化を十分に分析できないことが分かった。

今後の研究ではVarcoC(子音の時間長の変動係数),VarcoV(母音の時間長の変動係数))を抽出することが必要になるだろう。この二つの大域的変数はテンポの影響を受けないため、現象をもっと細かく分析できるはずである。今後、日本語を母語とする学習者を対象とし、大学で収集した音声データを用いて、フランス語のリズムの習得過程を定量的に考察したいと考えている。日本語母語話者にフランス語と日本語のテキストを,また、フランス語母語話者にフランス語のテキストを音読させたものを録音し、子音と母音の時間長の変動係数を音声波形とピッチ線により比較するという方法をとりたい。また、これらの研究結果に基づき、学習者が抱える問題を克服するための新しいアプローチと教材を作成したいと考えている。

(東北大学)

レミ・ド・グールモンの『シクスティーヌ』再読

―― 心理学の疾病研究の活用法を手がかりに ――

合田 陽祐

はじめに

フランス象徴主義は、一般には 19 世紀後半の詩や劇の運動として認識されている. だが近年では、1880 年代後半から 1890 年代後半にかけて、象徴主義者を自認する詩人たちが、まとまった数の小説やコント集を発表していたことに注目が集まっている¹. 以下に検討するレミ・ド・グールモン (1858-1915) の『シクスティーヌ』(1890) は、この「象徴派の小説」の先駆けの一つである². 従来この作品に関しては、主人公のユベール・ダントラーグが小説家であることと³、彼が作中で執筆する物語テクストが、そのまま小説のなかに組み込まれているという、小説内小説の構造に関心が集まってきた。このアントラーグの小説に、彼とその恋人シクスティーヌの関係が投影されていることから、『シクスティーヌ』は実人生を芸術作品に変換する試みとして、あるいはその過程を描いた作品として理解されてきた⁴. こうした読み方には一定の妥当性がある。というのも

¹ 単行本にまとまっている研究としては次のものが知られている. Jean-Pierre Bertrand et alii., *Le Roman célibataire : D'*À Rebours à Paludes, José Corti, 1996; *Romans fin-desiècle, 1890-1900*, textes établis, présentés et annotés par Guy Ducrey, Robert Laffont, coll. « Bouquins », 1999. 後者については編者が付した長文の解説を参照のこと. またベルトラン・ヴィベールが手がける「象徴派のコント」叢書は三巻まで出版されている. *Contes symbolistes*, textes réunis et présentés par Bertrand Vibert et alii, vol. I-III, UGA Éditions, 2009, 2011, 2016.

² 象徴派の小説は、ユイスマンスやヴィリエなどの 1880 年代のデカダン小説の流れを汲み、反ジャーナリズムとゾラへの敵対心(反自然主義)を共通点とする。商業的な成功はもとより度外視されていたが、のちのヌーヴォー・ロマンに通じるその高い実験性が、当時の文学場の変革に貢献したとして、近年の研究で再評価されている。代表作として、エドゥアール・デュジャルダン『月桂樹は切られた』(1888)、アンドレ・ジッド『アンドレ・ヴァルテールの手記』(1891)、ジョルジュ・ローデンバック『死都ブリュージュ』(1892)、マルセル・シュオッブ『モネルの書』(1894)などがしばしばあげられる。さらにそこに、アンリ・ド・レニエやギュスターヴ・カーン、カミーユ・モークレールやアルフレッド・ジャリ等の 1890年代の小説も加えることができる。彼らは、『メルキュール・ド・フランス』や『白色評論』、『プリューム』等の文芸小雑誌を 1890年初頭に創刊した若い世代のグループに属していた。3 Hubert d'Entragues。作中ではユベールやダントラーグ、アントラーグとも綴られるが、本稿では使用頻度の高いアントラーグで統一する。

⁴ Cf. Wieslaw Mateusz Malinowski, *Le Roman du symbolisme*, Poznan, Wydawnictwo Naukowe UAM, 2003, pp. 131-170; Valérie Michelet Jacquod, *Le Roman symboliste : Un*

当時,象徴派とその周辺の作家たちは,芸術的創造における自我や意識の位置づけをめぐり議論を交わしていたからである⁵.

だが、主人公がグールモンの分身たる小説家であることが強調される一方で、アントラーグの性格や個性に関わる部分、あるいはその行動原理については、これまであまり注意が払われてこなかった。グールモンは文壇においてイデアリスム(観念主義)の理論家として知られており、主人公のアントラーグも観念主義者という設定になっている。

またアントラーグには、世紀末小説の多くの登場人物と同様、神経症 (névrose) の徴候が見られる6. 彼は物事の細部に異常なこだわりをもち、感受性が極度に研ぎ澄まされた人物である. 幻覚や固定観念に取りつかれているという描写もなされている. くわえて『シクスティーヌ』には、アントラーグが心理学の著作を読む場面が挿入されている. のちにくわしく見るように、グールモンはこの主人公を造形するさい、心理学の疾病研究を参照しているのだ.

本稿では、グールモンがこのイデアリスムと心理学の言説をどのように接続させているのかを検証する.以下ではまず、主人公の性格的特徴を示すべく、アントラーグが頻繁に見る幻覚の分析から始める. 続いてこの主人公に固有の神経症の症状について検討したのち、シクスティーヌをめぐるアントラーグの行動と、疾病研究の関係を確認する. そして最後に、主人公の病の表象と彼の観念論的傾向が交差する地点を、具体例に即して検証する. 以上をとおして、グールモンのイデアリスム論が、主体とその外部の関係性の再規定をめぐって展開されていることを明らかにするのが、本小論の目的となる.

I. 幻覚と世界の再創造

グールモンは評論集『仮面の書』(1896)の序文で、「文学とはじっさい、思考の芸術的な発展と、想像上の主人公たちを用いた思考の象徴化にほかならない7」と述べている。『シクスティーヌ』もまた、主人公アントラーグの視点を

sur les écrivains d'hier et d'aujourd'hui, Mercure de France, 1896, p. 9.

art de l'« extrême conscience », Droz, 2008, pp. 159-236. 日本語でもこうした関心やテーマから書かれた次の優れた『シクスティーヌ』論を読むことができる。中野知律「『シクスティーヌ』,あるいは世紀末小説の鏡」,『言語社会』(5),一橋大学大学院言語社会研究科,2011 年,pp. 170-191.

^{5 1880} 年代後半から若い世代の支持を集めていたモーリス・バレスは、『自我礼賛』の三部作 (1888-1891) において、自我をそれに対抗する非我や無意識との関係から考察している. 6 吉田城はかつて神経症と文学の関係を扱った著作において、次のように述べていた.「バルザックからプルーストまで、フランス文学の正統的な散文文学の所産は、今日読み直してみると、神経症の問題と切っても切り離せない関係にあるように見える.」吉田城『神経症者のいる文学――バルザックからプルーストまで――』、名古屋大学出版会、1996 年、p. 14. 7 Remy de Gourmont, Le Livre des masques. Portraits symbolistes, gloses et documents

借りて、グールモンがイデアリスムに基づく独自の世界観を示した作品とみなすことができる。グールモンは、世紀末の文壇で流行したショーペンハウアーのイデアリスムを、主観主義(subjectivisme)の思想として積極的に受容した作家として知られ、しばしば自らのイデアリスムを、この哲学者の著作のタイトルにちなむ「世界は私の表象である」というフレーズに要約している。じっさいアントラーグも、「世界とは私のことであり、世界は私にその実在性を負っている。私は世界を自分の感覚で創った。世界は私の奴隷であり、それに対し何人も権力をふるうことはない8」と述べている。このようにアントラーグは、自己の外部に客観的な世界を認めず、すべては自らの意識の投影であるとみなす、独我論に近い立場を表明している。

ただし『シクスティーヌ』で参照されているのは、イデアリスムの教義としての「表象としての世界」だけではない、グールモンはアントラーグを造形するさい、心理学者のテオデュール・リボー(1839-1916)の一連の疾病研究、とりわけ『記憶の疾患』(1881)と『意志の疾患』(1883)で紹介されている精神疾患に関する症例を参照しているのだ。観念主義者であるアントラーグは、同時に神経症的な傾向をもった主人公なのである。

アントラーグの神経症の種類については、本稿の二節で検討する. その前に物語のあらすじを確認しておこう. 観念主義者のアントラーグにとって、意識の外に世界は存在しないはずだった. だがその例外となる存在として、ヒロインのシクスティーヌ・マーニュが現れるところから小説は始まる. 「シクスティーヌのイメージのなかに、無視され、ほぼ否認された外的世界が呼び出された. 白状せねばならないが、彼はこの感じやすい世界の部分に興味をいだいていた9.」このように物語の中心には、外界から切り離されたアントラーグの観念世界と、シクスティーヌが象徴する物質世界との対立およびそのせめぎ合いがある. アントラーグは情熱の対象であるシクスティーヌの言動を事細かに分析していく. だがシクスティーヌの方は、いつまでも行動に踏み出せないアントラーグに愛想をつかし、最終的には別の劇作家のもとに去ってしまう. 以上が物語の簡単なあらすじだが、先に述べた入れ子構造や、複雑なプロットにより、物語は複雑に入り組んだものとなっている.

次にアントラーグの性格や彼に発現する症状について、引用を交えて見ていこう.彼は自己の精神世界の象徴たる「書斎」にひきこもり、そこで創作のためのメモを取りながら、ひたすら内省を続けている.書斎の外のパリの町ではなく、この密室こそが、彼にとっての真の世界を構成しているのだ。これは一見すると、グールモンが敬愛した『さかしま』(1884)の主人公デゼッサントの生活のパロ

⁸ Remy de Gourmont, Sixtine, roman de la vie cérébrale, Albert Savine, 1890, p. 13.

⁹ *Ibid.*, p. 137.

ディーのように見える. だが, アントラーグのケースが特殊であるのは, 彼が恒常的に「幻覚」(hallucination)に取りつかれている点にある.

パリは彼〔=アントラーグ〕にとって街路でなく、並木道でもなく、劇場でもなかった。パリは、アントラーグにとって「書斎」の狭苦しい仕切りのなかに閉じ込められており、そこには彼の想像力が生みだした善き幽霊たちが棲みついていた。悲しげで曖昧な、物思いに耽るかたちのないこれらの存在たちは、実体化することを切に望みながら、ひっそりと蠢いていた。アントラーグは、ほとんど薄気味の悪い睦まじさでもって、彼らと一緒に暮らしていた。彼らを見たり、言うことを聞いたりして、彼らの活動に必要な環境に、彼らとともに身を置いていた。ようするにアントラーグは、幻覚のもっとも鋭い現象に取りつかれていたのだ10.

小説の主人公の幻覚体験といえば、ジャン・モレアスの「象徴主義宣言」(1886) が想起されるが、そこに描かれている作家の理想像は、アントラーグと重なり合うものだ.「象徴的小説の概念は多様である.あるときは独特な登場人物が、自らに固有の幻覚、個性によって変形された環境のなかで生きる.そしてこの変形されたもののなかに、唯一の現実がある¹¹.」

アントラーグにとって、外的世界は彼の心的状態を反映したものである.上で見た、実体のない「幽霊」たちも、彼の独特な個性の象徴であると同時に、病的な症状としての「幻覚のもっとも鋭い現象」によって生み出された対象なのだ.そしてアントラーグにとっては、このように幻覚を見ることは異常な事態ではなく、あくまで日常生活の一部なのである.このようにアントラーグの症状は、彼の視覚体験に内在化されており、このことが読者にとって彼の病を見分けにくくする要因となっている.

この幻覚と外的世界の関係について、もう少しくわしく見ておこう.上のケースにくわえて、『シクスティーヌ』における幻覚は、遠く離れた場所にいる人物を欲望することで、その人物が傍らにいるような錯覚をもたらす現象として規定されている.

私が非常に強く思う対象は、私の目の前で目に見えるかたちをとり、ときには私の触覚に組み込まれて、触知可能な物質性をまとう。一般的な判断によれば、私はたしかに私から遠く離れた人々の存在を感じたのだが、私はそれに驚きはしない。通常の感覚とは、真の幻覚にほかならないのだから。そ

¹⁰ *Ibid.*, pp. 18-19.

¹¹ Jean Moréas, *Premières armes du symbolisme*, Vanier, 1889, p. 39.

れが真か偽であるかは、私にとってはどうでもよいし、ほとんど気にもかけていない¹².

アントラーグにとって、外的世界は自らの心的状態を反映したものであるが、ここで注目すべきは、欲望の対象たる不在の人物のイメージに、触知可能な物質性を付与できるとされている点である。多くの論者が指摘するように、上の引用文中に下線を付した部分は、イポリット・テーヌの『知性について』(1870)における有名な定義「外部の知覚とは真の幻覚である」を書き換えたものである¹³. グールモンは外的世界の実在を認めないため、テーヌのテクストでは「外部の知覚」と記されていた箇所が、「通常の感覚」という表現に置き換えられている.こうしてグールモンは、幻覚という語が喚起する異常性を取り除いたうえで、幻覚に知覚よりも「強い思考」を見出している¹⁴. ただし幻覚によって生み出されたイメージとそこに付与される物質性は、他人にとっては不可視であり触知できないものである.これについては次の引用を見てみよう.アントラーグが、不在であるシクスティーヌを自らの傍らに幻視している場面である.

シクスティーヌは彼〔=アントラーグ〕から離れたところにいた. だが彼は隣にいる彼女を見ていると思っていた.

午後をとおして、彼は彼女を伴って散歩している幻影(illusion)を持ち続けていた、彼女は色をさまざまに変化させるドレスのなかに現れていた […] ¹⁵.

アントラーグは自己の欲望の投影により、シクスティーヌの幻影を出現させる.だがこのイメージは他人には知覚されないため、アントラーグの妄想だということがわかるのだ.「奇妙な感じだ、あなた〔=アントラーグ〕は一人だけれど、まるで見えない人物があなたに付き添っているとでも思わせたいのですか?――私はいま一人ですよ、サングラードさん¹⁶.」このように、アントラーグの幻覚のイメージに、客観的な実在性を認めることはできない.だが、グールモンが先に述べていたように、客観的であるか否かについては、「どうでもよい

¹² Sixtine, op. cit., p. 66. 下線による強調は引用者による.

¹³ Cf. Hippolyte Taine, *De l'intelligence*, t. II, Hachette, 6° éd., 1892, p. 13. 以下の研究が代表的なものとしてあげられる. ジャン・ピエロ『デカダンスの想像力』, 渡辺義愛訳, 白水社, 1987, p. 108.

¹⁴ テーヌとの相違点として,グールモンは幻覚の真偽ではなく,対象への欲望の強弱を問題にしている.

¹⁵ Sixtine, op. cit., p. 41.

¹⁶ *Ibid.*, p. 42. サングラードはアントラーグの知り合いの詩人である.

し、ほとんど気にもかけていない」のである. イデアリスムの教義に照らして定 義するならば、外的世界が存在しない以上、個人の欲望を投影したイメージにこ そ, その人物にとっての固有の真実が宿るのである. アントラーグにとって幻覚 という鋭い現象は、このように自己にとっての世界(外的対象)を再創造するた めに不可欠な装置として,重要な役割を果たしているのである.

II. 分析の病

アントラーグに特徴的な病としてもうひとつ見ておきたいのが,その限度を 超えた分析的精神である.

絶えざる頭脳活動である私の存在とは、普通の恋愛からなる普通の生活の 否定そのものだ、私は社会が要求する利他主義の諸傾向をまったく持ちあわ せていない. もし仮に私が、創造物のために、自己から超然としていられた としたら、それは想像力豊かな人のやり方によって、すべての部品を用いて 情熱の対象を作り直すことによってだろう. あるいは分析家 (analyste) の ごとく、私のさまざまな印象の仕組みを入念に、注意深く観察することによ ってだろう17.

ここではアントラーグの気質が「分析家」や「注意深い観察」といった言葉に よって示されている. 先行研究で指摘されているように、アントラーグの欲望は、 厳密にいえばシクスティーヌそのものには向かっておらず、彼女から得られる 印象を入念に自己分析することに向けられている. アントラーグはその細部を じっくりと観察することで、シクスティーヌを自己の世界に組み込み、所有しよ うとするのだ18.

じっさい、先に引用した箇所に続く部分には、シクスティーヌが着る「色をさ まざまに変化させるドレス」の「軽やかでほのかに緑色の絹の生地には、金色の 折れ目が入っていた. 彼女のブーツはまったく音をたてず、言葉の代わりに微笑 と、筋肉のさまざまな変化が、彼女の思考を表現していた19」と記されている. ここでアントラーグは、シクスティーヌの「微笑」や「筋肉」といったかすかな 徴候のなかに、彼女の存在の本質が宿っていると考えている.また、「筋肉のさ まざまな変化」や「色をさまざまに変化させるドレス」という表現から読み取れ るように,刻々と色や形を変化させる,揺れ動く謎めいた記号として,シクステ ィーヌの存在を捉え直そうとしている.

¹⁷ *Ibid.*, p. 34.

¹⁸ Cf. Ivanna Rosi, « Les couleurs de Sixtine : perception visuelle, images mentales, métaphores » dans Remy de Gourmont, Cahier de L'Herne, 2003, pp. 224-233.

¹⁹ *Sixtine*, *op. cit.*, p. 41.

ただし分析家アントラーグの解釈は、日常のコミュニケーションに支障をきたしてしまうほど複雑に入り組んでいる。鋭い幻覚にとらわれているアントラーグは、他人が気に留めないような些細な動作や言葉のなかにも、何らかの意味を読み取ろうとしてしまうのだ。こうして「推論」によって際限のない「文学的な解剖」を施してしまうがゆえに、彼の分析には終わりが見えない。

単語を耳にすると、アントラーグはいつもそのなかには思考があるのだと思っている.

このことが、彼の生活と対話を大いに複雑なものにし、彼の行為と応答を著しく遅らせていた。だが、彼は文学的な解剖をするしかなかった。そして彼は、複雑な精神構造や、のちに彼がつかの間の解釈学の推論によって解明する諸問題と出会うことを欲していた。

クルミの中身はたぶん空っぽだったので、彼は木に石ころを投げて、別の クルミをもっと降らせようとした²⁰.

ここでアントラーグは、硬い殻で覆われたクルミ(単語)の内部に、ぎっしりと詰まった中身(発話者の思考)を夢想している。だが彼がじっさいに手にしたクルミの内部は空洞であった。そこでアントラーグは、別のクルミの観察に取りかかろうとする。このように彼の分析は無際限に続いていく。じっさいアントラーグにしてみれば、クルミの中身が空洞であり、実体がないからこそ、そこに思考(と可能な意味)を次々と夢想することができるのだ。語り手はアントラーグのこうした病的な傾向を、「空のクルミの古い病21」と呼んでいる。ここで確認しておきたいのは、アントラーグの過剰な推論や分析が、一種の知的な病として描かれていることだ。入念な観察と解釈過剰な妄想とが混然一体となり、その判別がもはやつかない地点に、アントラーグの分析的知性が設定されているのである。

アントラーグにとって、このクルミはシクスティーヌの象徴であり、その内部にあるものを夢想し続けることが、彼にとっての恋愛を意味する.「私は彼女[=シクスティーヌ」のなかにあるものを知りたい. 私はこの神聖なる森の薄暗い茂みのなかに冷静に侵入したいのだ²².」シクスティーヌがアントラーグの心をとらえて離さないのは、彼女が刻々と変化し、判読することが困難な、謎めいた存

²⁰ *Ibid.*, p. 11.

²¹ *Ibid.*, p. 45. クルミと解釈妄想の問題系については,次の研究から重要性を教えられた. Cf. Julien Schuh, « La vieille maladie des noix vides: Paranoïa herméneutique dans *Sixtine* », dans *Modernité de Remy de Gourmont*, Presses universitaires de Caen, 2010, pp. 221-222.

²² Sixtine, op. cit., p. 8.

在であるからだ.シクスティーヌは絶えずアントラーグの夢想に働きかけ,彼を次なる解釈へと駆り立てる.「かくも細やかな夢想は,たしかな獲得物の存在を示していた.アントラーグはまだそのことに気づいていなかった.あるいはおそらく,判読できない文字の女性的で心地よいかたちが,彼の好奇心よりも,彼の夢想の方に働きかけたことを認めてやりたくなかったのだ²³.」

このようなアントラーグの症状は、ジャン=エチエンヌ・エスキロールが『医 学,衛生学,法医学的観点から考察された精神病』(1838)で分類したモノマニ ー(monomanie)に,そのもっとも近しい例を求めることができる²⁴.「単一偏 執」や「単一狂」と訳されるこの症例は、部分的な狂気(理性ある狂気)を意味 し、現代における偏執症(パラノイア)に通じる.症状としては、一点において 精神的な異常を示す疾患で、部分的に妄想を含むとされる. モノマニーの症状は 神経症に近く25, エスキロールは三つの下位概念を設けて, その分類を試みてい る. 吉田城が『神経症者のいる文学』で引いている次の文章には、モノマニーの 特徴がよく示されているので、引用しておこう.「知的混乱は、唯一の対象ある いは限定された対象群に集中している。これらの患者は誤った原理から出発し ており、その原理から導き出される諸論理に素直に従っている. またその原理か ら自分の感情, 行為, 意志を変化させる当然の結果を引き出す. この部分的妄想 を除けば、皆と同じように感じ、思考し、行動するのである26.」次節以降で見 ていくテオデュール・リボーの『意志の疾患』には、エスキロールのモノマニー の症例が紹介されており27、リボーの読者であったグールモンは、モノマニーと いう症例を知っていたと考えられる.

さてアントラーグは、シクスティーヌの言動を分析し、彼女のイメージを自己の世界のなかに再構築しようとするが、最終的には彼女への想いを成就させることができない。そこには、分析ばかりで一向に行動に踏み出せない主人公の姿がある。このようにアントラーグが自らの意志を実現できない背景には、テオデュール・リボーの疾病研究の影響が見て取れる。以下では、リボーが提示する症例を、グールモンがどのように用いているのかを確認していこう。

²³ *Ibid.*, p. 44

²⁴ Cf. Étienne Esquirol, *Des maladies mentales considérées sous le rapport médical, hygiénique, et médico-légal,* J.-B. Baillière, 1838.

²⁵ 18 世紀末に神経症から精神病を区別したのはフィリップ・ピネルだが、エスキロールはその弟子である. 従来、神経症は広く神経系の疾患を指す語として用いられてきたが、ピネルによって精神病は、神経症よりも重篤な精神障害として位置づけられた.

²⁶ 『神経症者のいる文学』, 前掲書, p. 192. この書物の第六章はモノマニーの分析にあてられている.

²⁷ Théodule Ribot, Les Maladies de la volonté [1883], Félix Alcan, 5e éd., 1888, p. 39.

III. 疾病研究の活用

グールモンの世代にとって、心理学者テオデュール・リボーは、広く『ショー ペンハウアーの哲学』(1874)の著者として知られていた.この著作はジャン・ ブールドーの『思想, 箴言と断章』(1880)と並び,『意志と表象としての世界』 の全訳が刊行される前のフランスでは、ショーペンハウアーの思想を知るため の最良の手引きであった. のちに『文学散歩』のなかでグールモンは次のように 証言している.「実のところ、私たちの何人かに対する哲学教育は、ブールドー 氏とリボー氏の『ショーペンハウアー』によってすでになされていた. 私たちは, 世界が悪であることと、世界が私たち自身との関係でのみ存在することの両方 を, すでに陶然として発見していたのだ28.」じっさい, 『シクスティーヌ』でア ントラーグが,「世界とは、私がそれについて抱く観念のことで、私の脳の特殊 な変調が、この観念を規定している29」と語るさい、次のリボーの教えからの影 響は明らかである. 「このような客体の主体への依存関係が、表象としての世界 の観念的性格を構成している. 私たちの肉体そのものも、私たちがそれを客体と して、すなわち広がりをもち活動するものとして認識する限り、それは私たちの 脳の直観のなかにのみ存在する,脳の現象に過ぎない30.」グールモンにとって, リボーの著作は、ショーペンハウアーのイデアリスムを心理学に引き付けて解 釈するきっかけを与えたのである.

『シクスティーヌ』にはリボーへの言及箇所が二つある. 主人公の書棚にはリボーの本が置かれており、次のようにこの心理学者への共感が語られている.

まさにそのとおりだ、と哲学書棚の狭い一角に本を戻しながらユベール [=アントラーグ] は思った. それはリボーの、実証的だが幻想から目を覚まさせる心理学の本で、憂鬱ではなく、何か理由のある倦怠感をもたらす、ひと時のなかなかよい読書だった. この几帳面な弁証家は、私の人格が不安定な釣り合いからなり、鍵盤上のたった一音のズレが台無しにしうることを、私に教えてくれる. だがそうなってしまってもよいではないか. 固定観念で制限された狂気は、人生を耐え忍ぶことに大いに役立つはずなのだから31.

アントラーグはリボーから,人格が根本的に壊れやすいものであり,人は狂気 に陥る危険性と隣り合わせであることを学んだという.だが他方で,狂人は自ら

 $^{^{28}}$ Remy de Gourmont, $Promenades\ littéraires,\ 4^{\rm e}$ série, Mercure de France, 1912, pp. 71-72.

²⁹ Sixtine, op. cit., p. 76.

³⁰ Théodule Ribot, *La Philosophie de Schopenhauer* [1874], 9° éd., 1903, pp. 47-48. 傍点による強調は、原文におけるイタリックの箇所をあらわす.

³¹ Sixtine, op. cit., p. 130.

に降り注ぐ現実世界の厄介事をまったく意に介さないので、一般人にとっては辛い人生を耐え忍ぶことができるだろうとも述べている――ただこの場合、引用文中にあるように、完全な狂気に陥らぬよう節度を設ける必要がある。このように、グールモンがリボーの心理学に関心を寄せた背景には、主体とそれをとりまく外的世界の関係という、イデアリスムの問題が横たわっている。すなわちグールモンは、主体が外部から被る影響を無化する方法を、精神疾患のなかに見出せると考えていたと思われる。だとすれば、すでに見たアントラーグの幻覚の症状は、現実をそのまま受け入れることへの拒否であったと解釈できる。

ここで、グールモンが関心を寄せる病理学(pathologie)というリボーの方法 論に注目してみよう.「リボーが記憶と意志の法則を見つけたのは、精神病理学 においてではなかったか?32」グールモンが仄めかしている著作の一つ、『意志 の疾患』(1883)の序文で、リボーは次のように語っていた. 「私はこの仕事 で、意志についても、記憶について以前おこなったことを試みる. すなわち、異 常なものについて研究し、その研究から正常な状態についての結論を導き出す つもりである33.」病理学では、病気の形式と健康状態のあいだに相関関係があ るという前提のもと、異常な状態に焦点があてられる.この異常な状態への関心 は、小説で「真の作品」と呼ばれるものの定義にもあらわれている.

[…] いかにして世界から孤立した頭脳が一つの世界を作り出すかを、私は示すつもりだ. 生きるために、周囲のいざこざと関わる必要があるのかは、『熱愛者』を読めばわかるだろう. だがそれは一つの試みに過ぎない. わたしにとっての真の作品とは、次のようなものだ. それは、あらゆる感覚が完全に麻痺して生まれた存在であり、そこでは脳と栄養摂取器官だけが活動している. その存在は、外部のいかなる事物を認識することもなかった. 皮膚の感覚そのものがないからだ. 電気による、あるいは他の何かによる治療によって奇跡が起こり、部分的に回復すると、その存在はしゃべることを学び、自らの脳内の生活を語りだすが、その人生は他の人の人生にも似ている. これが〔上の理想の作品の〕出発点であることをわかってもらい、少なくともその医学的実例を見つける必要があるだろう34.

ここで言及のある『熱愛者』とは、作中でアントラーグが執筆する小説のタイトルである35. 上の引用によれば、「真の作品」すなわち作者が本当に書きたか

³³ Théodule Ribot, Les Maladies de la volonté, op. cit., p. 1.

³² *Ibid.*, p. 117.

³⁴ Sixtine, op. cit., p. 161. 亀甲括弧内は引用者による補足である.

³⁵ 六章からなる『熱愛者』は『シクスティーヌ』のなかに一章ずつ間隔をおいて折り込まれており、読者はこの二つの物語の展開を並行して(ときにはページをさかのぼって)追うこ

ったのは、世界から切り離され、「あらゆる感覚が完全に麻痺して生まれた存在」 が語る「脳内の生活」である. このことは、『シクスティーヌ』の副題「脳内生 活の小説」(roman de la vie cérébrale)とも一致する.そして語り手は,その ような物語を書くには、想像力を用いるのではなく、しかるべき「医学的実例」 を参照する必要があると述べている. そうした実例は, 病理学の方法を採用する リボーが豊富に提供するだろう. じっさい『記憶の疾患』(1881)の序文にも, 「この小著は、あらゆる種類の選集のなかに散らばっていて、まだまとめられて いない多くの所見と奇妙な症例を、読者に知らせることになるだろう36」と記さ れている.

さて、多くの読者にとって『シクスティーヌ』でもっとも謎めいているのは、 アントラーグがシクスティーヌへの想いを断念してしまうことだろう. だがそ の理由は、グールモンが参照している『意志の疾患』の症例を検討することで明 らかになる. 以下では、グールモンのリボー受容に関する先行研究を踏まえつつ、 グールモンがリボーの意志論を参照していることを確認し、それが小説のどの ポイントで活用されているのかを検証する37.

まずリボーの意志論の基本的な枠組みを整理しておこう38. リボーによれば、 意志は行為へと変換されるが, あらゆる意志的な行為は, 心的側面と生理学的側 面の二つに区分できる. 心理現象における生理学的要因 (細胞や器官の機能や作 用との関係)を重視するリボーにとって、前者の心的側面は付随的なものであり、 後者の生理学的側面が本質的なものとみなされる.「意識の状態である「私は欲 する (je veux)」は、状況を明らかにはするが、それ自体ではいかなる効力もも たない. そして, 非常に複雑な精神生理学の機構があり, そこにのみ行動する力 と妨げる力が存在する39.」リボーが注目したのは、意志が行為に変換されるさ い、行動か制止かの選択(choix)によって表現されるという点である。この選 択にさいしては、主体の性格や個性が重要な役割を果たすとされる(ただしリボ ーにとって、自我や人格は単一ではなく、複合的で進化するものである).

このような理路から、リボーは意欲 (volition) を、複数の観念のあいだでな される, 衝動 (impulsion) か制止 (arrêt あるいは inhibition) かの選択によっ て説明する. 正常な状態においては、意識の諸状態(感情や観念)と、それを表

psychologique », 2005, pp. 78-84.

とになる.

³⁶ Théodule Ribot, Les Maladies de la mémoire [1881], Félix Alcan, 5e éd., 1888, p. IV.

³⁷ リボーの疾患三部作から『シクスティーヌ』への影響関係を探ったものに次の研究があ る. Gaële Guyot, « Sixtine, les maladies de la mémoire, de la personnalité et de la

volonté », dans Modernité de Remy de Gourmont, op. cit., pp. 205-216. 38 以下の説明では次の解説を参照している. Serge Nicolas, Théodule Ribot. Philosophe breton, fondateur de la psychologie française, L'Harmattan, coll. « Encyclopédie

³⁹ Théodule Ribot, Les Maladies de la volonté, op. cit., p. 3.

現する運動や行為は、同じ目的をもつ。このとき、対象の受け入れ(衝動)か、 拒絶(制止)かが判断される。だが、疾患による異常な状態においては、衝動(と 制止)が機能不全に陥る。リボーはその原因として、衝動の減退(affaiblissement) と消滅(anéantissement)をあげている。このうち、衝動の減退は、衝動の欠 如(第一章の主題)と過剰(第二章の主題)の二つが要因となる。一方では、衝 動が減退するとき、行為への変換が困難となり、他方では、衝動が過剰になると、 制止が機能不全に陥るのである。

これらのうち、アントラーグの症状は、衝動の減退を引き起こす、衝動の欠如に当てはまると考えられる。というのも、グールモンはアントラーグに、彼の意志と行為の連絡が不十分であることを嘆かせているからだ。「意志と行為のあいだには、私が飛び越えようとするなら、そこに落ちてしまうような穴が穿たれている。これは身体的な一つの印象だ40.」このように意志の行為への変換が困難であるため、アントラーグとシクスティーヌのあいだで行き違いが頻繁に起こり、最終的に彼はシクスティーヌを恋敵に譲ってしまうことになるのである。

リボーが「意志の疾患」と呼ぶ状態では、知性の働きは維持され、組織や器官にも異常は見られないが、意志(「私は欲する」)を行為に変換することができなくなる. 先に見たように、リボーは意志を心的側面と生理学的側面の二つに区分しているが、この二項のあいだに生じる齟齬が、疾患と呼ばれるのである. これをリボーは、「疾患は人間を分割する」と表現している.

- 一,筋肉組織と運動器官は無傷である.この点に関しては,何ら障害はない.通常の日常生活を構成する自動的な活動は持続している.
- 二,理解力は申し分ない.少なくともわずかでも衰弱したと認めうるものは何もない.目的も明確に理解できるし,手段についても同様である.だが,行為への移行は不可能である.

したがってここには、もっとも厳密な意味での意志の疾患がある.疾患は私たちにとって奇妙な経験を作り出すと申し添えておこう.疾患は人間を分割し、個々の反応を無力化させるが、それ以外の部分は無傷である.疾患は私たちにとって、可能な限り純粋な知性に還元される存在を生み出す41.

このように主体が欲することを行動に移すことができないのは、意志に服従しない運動が作り出されるためだとされている.こうしてグールモンは、先に言

⁴⁰ Sixtine, op. cit., p. 191.

⁴¹ Théodule Ribot, Les Maladies de la volonté, op. cit., pp. 49-50. リボーはこの原理を繰り返し説明している.「この意志の疾患は、一部は性格の弱さに起因し、一部は知的な状態に由来する. 空疎な考えの流れが、現実に適合しない、無為な行為に翻訳されるのは自然なことである. そして個々の反応の無力さが重大な役割を演じるのである.」(Ibid., p. 61.)

及した「真の作品」を書くために、心理学の疾病研究を参照するわけだが、それによって自作の理論武装を試みているわけではない。そうではなく、想像力を過信することを避け、症例の参照という意味での現実への参照を徹底させているのである。

次節では、こうした意志の疾患が、どのように主人公の言動に反映されるのか、 その詳細を見ていくことにしよう.

IV. 他者の支配の中断

以下では「観念のミツバチたち」と題された章を検討する。『シクスティーヌ』では、人間の脳がミツバチの巣に喩えられている。「人間の脳という驚異の巣箱で、観念のミツバチたちは、彼らの細胞の巣に、思考をしたたらせている42.」この頭のなかで醸造される個人の思考が、外部の世界に影響を及ぼすことはない。だがアントラーグによると、彼の夢においては、外部の事象のコントロールが可能になったという。夢において、自らの意志が外界に投影されることで、現実世界の法則とは逆に、観念に事物が従属する感覚を味わったのである。やがてアントラーグは、「起こりうる事実を思い描くことは、その事実が彼の人生において孵化するきっかけとなる」ことを確信するに至る。

夢が一連の活動に干渉し、その活動を決定する諸要因を打ち砕くということが、あまりにも頻繁に彼[=アントラーグ]に起こったので、もちろんこのような結果に、彼が不用意に驚かされることはなかったが、今度は事実が観念に従属するというまことに驚くべきことが起こったのだった。[…]予感や偶然の一致によっては、このような巡り合わせを説明できないし、それにそれは、彼が観察した百度の巡り合わせのうちの一つなのだった。つまり、起こりうる事実を思い描くことは、その事実が彼の人生において孵化するきっかけとなる。この事実は、外からの意志によって修正され、彼が生きている時空間の条件に適合させられてはいるが、彼の本質的で原初的な構成要素として認められるものである43.

あとは夢を制御することで、現実の対象(シクスティーヌ)に、意志を介入させることができるはずである。意志を押し付けることで、他人を従わせるというこの発想は、一見抽象的でわかりづらいかもしれない。だが、アントラーグが作家であることを思い出してみよう。彼は自らの作品(意志)をとおして、固有の世界観を読み手に押し付け、世界を自らの影響下に置こうとしているのだ。

⁴² Sixtine, op. cit., p. 137.

⁴³ *Ibid.*, pp. 134-135.

だが奇妙なことに、アントラーグがこの能力を開発することはなかったため、 支配の試みが中断されたことが明らかとなるのである.

したがってアントラーグは、自分が人を従わせるような知性の水準にまで達したことがわかった。すなわち、一見すると制御不可能な事物の秩序が、彼の夢に屈していたのである。今や問題は、夢を制御することであり、その意志をもつことだった。このことはまたまったく別の問題だった。そのため彼はこの能力を開発しようとすることもなく、彼はこの能力を初歩的な段階でしか身につけていなかった44.

アントラーグには、夢を制御して他人を従属させるという「意志」はあったが、 それが実行に移されることはなかった。これは、意欲に対する制止が働いたため だと考えられる⁴⁵.ここでもう一度、リボーの意欲に関する議論に立ち戻って考 えてみよう。次の引用で、リボーは意欲の働きを、努力という概念から説明して いる。

この意欲的な努力には二種類ある.一つは本能や、情熱や、習慣の運動を制止させることからなり、もう一つは、軟弱さや、無気力や臆病さを乗り越えることからなる.一方は否定的な結果をもたらす努力であり、他方は肯定的な結果をもたらす努力である.一方が制止を生み出し、他方が衝動を生み出す.この二種類はそれ自体が単一の表現に帰着しうる.すなわちそれは、意欲がもっとも大きな抵抗に出会うときに努力が払われる、というものだ46.

アントラーグは、シクスティーヌを自らの意志に従わせようとするが、最終的にはそれを断念してしまう。「肯定的な結果をもたらす努力」がおこなわれなくなってしまったのだ。これについては、「観念のミツバチたち」の一つ前の章の「肉欲の刻」で、ヴァレンチーヌという女性を前にして、アントラーグが「大きな落胆」を味わっていたことを思い出そう。彼が落胆したのは、どれだけ欲望しても、他者を所有すること(自らの世界に取り込むこと)はできないということを、経験的に知ったからである。「私のお気に入りで、私が望み、私のものであるこの美を、私が所有することはない。[…] 私が夢見ることのできるあらゆる種類の所有は虚しい。私が波のようになり、完全な渦巻のなかで、彼女の身体の

⁴⁴ *Ibid.*, p. 136.

⁴⁵ 次の研究では、主人公が望まないイメージの「制止」がうまく機能しなかったために、彼の支配が中断されたと解釈されている. Julien Schuh, *op. cit.*, pp. 225-226.

⁴⁶ Théodule Ribot, Les Maladies de la volonté, op. cit., p. 65.

あらゆる部位から同時に、私の生を彼女に浸透させることができたとしても、まだ彼女を所有したことにはならない⁴⁷.」このような所有不可能なものとしての他者のイメージが、アントラーグの衝動の減退を引き起こしたと考えられる。またこのことは、自らの意志を他者に押しつけるようにして支配を試みるというモデルが、不完全なものと判断されたことを意味しているのだ。

結びにかえて

以上の考察をとおして得られたことをまとめておこう.本稿では、主人公アントラーグの病的特徴を彼の幻覚体験に探ることから始めて、彼の妄想の性質が、モノマニーの症例に近しいことを確認した.そして、アントラーグの欲望の対象であるシクスティーヌをめぐる言動が、リボーの意志論を踏まえたものであり、他者を所有することはできないという諦めから、アントラーグに意欲の制止が発動していることを明らかにした.

象徴主義はしばしば想像力に依拠した運動といわれるが、グールモンは同時代の科学的言説であった心理学を参照し、「医学的実例」に基づいて小説の主人公の造形をおこなっていた。じっさい、1891年のジュール・ユレのアンケートのさいに、グールモンは次のように述べていた。「なまの現実の蔑視によってもっともうまく定められたイデアリスムは、私たちの感覚が知ることができる相対的な正確さをよりどころにするべきです48.」対象の直接的な知覚を放棄する代わりに、「相対的な正確さ」を突き詰める点に、グールモンのイデアリスムの特徴が認められるのだ。

以上を踏まえつつ, グールモンによる心理学の活用に見られる特徴を, 次の三点を軸に整理しておこう.

- 一. 医学的な症例に基づく登場人物の造形. これにより, フィクションのなかに, 科学の言説がもつ, ある種の客観性を付与している.
- 二. 観念主義者の内向的な性格と症例との親和性. 幻覚や妄想といった症例を活用して、主人公の内面世界の描写にリアリティを与えている.
- 三. 観念世界の膨張への歯止め. 意欲の制止の理論を適応することにより, 主人公を夢の不合理な世界に完全には移行させないようにしている.

グールモンのイデアリスムは一方で、自己の外部に客観的な世界の存在を認めない、閉じたシステムの上に成立している。他方で『シクスティーヌ』では、夢の助けを借りた「意志の投影」という方法で、外部との接触が試みられてもいた。だが、この方法では他者を所有することが不可能であったため、アントラーグの試みは中断されていた。作中でこの「制止」が働いたのは、グールモン自身、

-

⁴⁷ Sixtine, op. cit., p. 128.

⁴⁸ Jules Huret, Enquête sur l'évolution littéraire, Bibliothèque Charpentier, 1891, p. 137.

主体から対象への一方通行的な意志の投影というモデルが、不完全であることを自覚していたためだろう. 意志の一方的な押し付けではなく、対象と何らかのかたちで接触を図ったのち、相互的な交流をおこなう必要があるのだ. それなしに、自己を取り巻く世界を、主体が支配する道は開かれないのである. じっさい『シクスティーヌ』の刊行ののち、グールモンはこの観点から、自らのイデアリスム論の改築に取り組むことになるだろう.

ところでこうした心理学の言説や、医学的な実例の参照は、『シクスティーヌ』に限られた事例ではない。今後は、グールモンがこの小説以後に書いた作品の検討にくわえて、他の象徴派の作家たちの小説の分析例を増やしていく必要がある。また、現実世界への浸食を試みるイデアリスムの新しいプログラムは、象牙の塔に閉じこもる作家たちといった、従来の象徴派のイメージの更新に大いに寄与するだろう。このような美学的傾向が、象徴派の小説家たちによって着手された実験的試みをとおして――とりわけ文芸小雑誌グループのあいだで――どのように共有されていったのかを検証する作業が必要になってくるだろう。

(山形大学)

[résumé]

La place de l'étude des maladies mentales dans Sixtine de Remy de Gourmont

La plupart des commentateurs de *Sixtine* (1890) de Remy de Gourmont (1858-1915) se sont intéressés à la présence singulière de *L'Adorant*, roman dans le roman qu'écrit le héros de *Sixtine*, Hubert d'Entragues. Mais on oublie souvent que celui-ci est le lecteur passionné de Théodule Ribot (1839-1916), célèbre psychologue de la fin du siècle. En effet, le narrateur du roman souligne la nécessité d'avoir recours à l'« exemple médical » pour raconter une histoire intime. Dès lors, la présente étude tente de tirer au clair la façon dont Gourmont valorise dans la construction du personnage central le discours psychologique de son époque. Quels sont les éléments qui orientent Gourmont et son idéalisme schopenhauerien vers la thèse du psychologue ? Comment ce romancier symboliste découvre-t-il les liens qui unissent sa création littéraire et l'étude des maladies chez Ribot ? Cette réflexion permettra de redéfinir le rapport entre le monde des idées et son dehors autour du contexte du champ littéraire au début des années 1890.

Yosuké GODA Université de Yamagata

対話関係の構築と解体 --コミュニケーションにおける人称表現の機能--

牧 彩花

1. はじめに1)

フランス語における三つの人称は、教科書や参考書の動詞活用表では同価値のものとして扱われているが、Benveniste (1966)では、一人称と二人称の間には特殊な相関関係が存在し、これら二つの人称は、三人称とは根本的に性質を異にするものである、という興味深い指摘が為されている。これら三つの人称の関係性は本稿の題目にもある「対話関係」を考える上で非常に重要であるため、本論に入る前に引用を示しながら具体的にみていきたい。

まず,一人称・二人称と三人称の差異について次のような記述がある.

Dans les deux premières personnes, il y a à la fois une personne impliquée et un discours sur cette personne. « Je » désigne celui qui parle et implique en même temps un énoncé sur le compte de « je » : disant « je », je ne puis ne pas parler de moi. À la 2º personne, « tu » est nécessairement désigné par « je » et ne peut être pensé hors d'une situation posée à partir de « je » ; et, en même temps, « je » énonce quelque chose comme prédicat de « tu ». Mais de la 3º personne, un prédicat est bien énoncé, seulement hors du « je-tu » ; cette forme est ainsi exceptée de la relation par laquelle « je » et « tu » se spécifient.

Benveniste (1966a : 228)

Benveniste は、対話の行われるその場に存在し、一回性の発話行為によってのみ特定の個人に結びつく、一人称・二人称のみを「人称 personne」とし、これに対して、対話の場の外に存在し、特定の個人への結びつけは発話行為とは無関係に単に文脈・状況との関係で定まる三人称は機能として「非人称 nonpersonne」であるとしている。「真の人称」である一人称・二人称の特性はその

¹ 本稿で扱う事例のうち、出典のないものは、筆者がフランス語ネイティブスピーカーの実際の発話を記録し、複数のネイティブスピーカーに文法性、使用可能性の確認を経た上で使用しているものである。

「唯一性 unicité spécifique」と両者が「入れ替わり可能 inversibles な関係にあること」であり、これらはいずれも三人称が持たない性質である。そしてこの性質が異なる「一人称・二人称」対「三人称」の対立関係は「人称性の相関関係corrélation de personnalité」と名付けられている²⁾.

更に、下記の引用から分かるように、「真の人称 personne」とされる一人称 と二人称の間においても対立関係は存在し、両者の対立関係は「主体性の相関関 係 corrélation de subjectivité」と呼ばれている.

Au couple *je/tu* appartient en propre une corrélation spéciale, que nous appellerons, faute de mieux, *corrélation de subjectivité*. Ce qui différencie « je » de « tu », c'est d'abord le fait d'être, dans le cas de « je », *intérieur* à l'énoncé et extérieur à « tu », [...] en outre, « je » est toujours *transcendant* par rapport à « tu ». Quand je sors de « moi » pour établir une relation vivante avec un être, je rencontre ou je pose nécessairement un « tu », qui est, hors de moi, la seule « personne » imaginable. Ces qualités d'intériorité et de transcendance appartiennent en propre au « je » et s'inversent en « tu ». On pourra donc définir le « tu » comme la *personne non-subjective*, en face de la *personne subjective* que « je » représente ; et ces deux « personnes » s'opposeront ensemble à la forme de « non-personne » (= « il »).

Benveniste (1966a : 232)

二人称が持たない一人称の特質とは、言語における発話内的性質(=つまり発話の行為者であること)と二人称に対する超越性であるとここでは述べられている。それゆえ一人称は「主体的人称 personne subjective」であり、それに対する二人称は「非主体的人称 personne non-subjective」ということになる。本稿において特に重要なのは、先にみたようにこれら二つの人称は常に入れ替わる関係にあるということである。

つまり、我々の日常的なことばのやり取りは、発話者と共発話者が、《je》と《tu》を交互に使い、発話毎に発話者と共発話者という役割を交替し、それぞれが交互に発話主体となることで成立している。そして、この一見当然にも思われる両者の相互的な関係が本稿の題目にもある「対話関係」である。しかし、フランス語の日常会話を観察していると、この「対話関係」が異なる様態で現れることが意外にも多くある。具体的には、本来、対話関係が存在しないところに仮想的な対話関係を構築したり、共発話者との間に存在する対話関係を敢えて解体

² Cf. Benveniste 1966a: pp. 228-231.

させたりするような操作である.本稿ではこのような通常の在り方から逸脱した発話者と共発話者の関係が実際のコミュニケーションにおいてどのような機能を果たしているのかについて,具体的な事例を挙げながら考察していきたい.

2. 仮想的な対話関係の構築

まず本章では、発話者が本来、対話関係の存在しないところ、つまり共発話者以外との間に仮想的な対話関係を構築する事例とその効果について検討する.

2-1. 二重化された自己との対話

はじめに、独り言の事例をみていく. (1)の事例は、発話者がゲームに熱中している際の発話であり、この «tu» は発話者である Mathieu 自身を指す. (2) も類似した事例であり、教師である Jean-Christophe が焦って授業の準備をしながら、学生を前にしてこぼした独り言である.

- (1) Allez! Mathieu, tu es fort! Tu es le meilleur!
- (2) Dépêche-toi, Jean-Christophe! Sinon tu vas être en retard!

このような二人称表現を用いた独り言は、鈴木 (1987:74-78) でも言及があるように、英語、フランス語をはじめとする複数の言語で確認される現象である。また、鈴木が指摘するように、これらの発話は、自分を攻撃するときや、非難するとき、励ますときなど発話者が感情的になっている場面で使用されることが多い。つまり、発話者の感情の高まりが、生きた対話の場を仮構するトリガーとなり、発話者の中で「見る自分」と「見られる自分」に自己分裂が起き、客体化されたもう一方の自己に対して、二人称表現を使用していると考えられる。

しかし、果たして発話者の感情の高まりだけがこのような自己との対話関係を形成させる要因といえるのだろうか.独り言に関する興味深い先行研究として、Goffman (1978)、長谷川 (2017) が挙げられ、これらの研究は独り言の社会的な側面を指摘している.Goffman によると、《Oops!》、《Hell!》、《Shit!》といった間投詞は、周囲に人がいない場合には頻度がはっきりと落ち、また、聞き手がどのぐらい離れているかによって、きちんと届くように声の音量の調節が行われ、更に悪態の場合は、近くに女性や子供がいる状況では頻度が下がるようである.つまり、これらの独り言に関する先行研究においては、一般的に自己完結的な行為だと考えられている独り言が、実際には、他者の存在を意識した社会的な行為であるという共通の認識が為されているのである30.

-

³ Cf. Goffman 1978 : pp.798-799.

さて、先にみた自分自身に二人称詞を用いる(1)(2)の独り言に関しても同じことが言えるのではないだろうか。完全に一人の状態で為された独り言のコーパスを入手することは発話の性質上困難であるが、これらの独り言が単に自己の感情の高まりによるだけではなく、対他的な性質をもつことを示す事例として、(3)のように共発話者との対話の真只中で二重化された自己との対話が挿入されるものもある。(3)はドラマの一場面であり、自身のエージェントに惚れてキスをしてしまった独り身の女優 Monica がそのエージェントの男 Gabriel の前で自分の早まった行動を責める際のやりとりである。

(3) Monica : C'est moi qui suis pas bien! Mettre en péril une relation de confiance de plusieurs années, pourquoi? Parce que je ne peux pas rester seule un petit peu? Mais ça va pas ma pauvre! Gabriel : Mais c'est normal. C'est humain. C'est pénible d'être seul.

« Dix pour cent », Saison 3 Episode 2, Netflix.

ここで、モニカは «pourquoi?» と自身に問いかけ、《Parce que...》と自らそれに応え、更にそれに対して、《Mais ça va pas ma pauvre!» と非難している。 «Ma pauvre!» は直訳すれば、「私の可哀そうな子」となるが、「可哀そうに」といった意味で使われる言葉であり、通常は他者を憐れんで使用する対他的な親愛表現である。しかし、ここでは、女性形で使用されていることからも、ガブリエルに向けられた発話ではなく、モニカ自身に向けられたものであることは明らかである.つまり、ここでも発話者は「可哀そうな私」と「それを憐れみ、叱咤する私」という二つの主体に分裂しており、(1)(2)と同種の二重化された自己との対話関係を構築しているといえる.この二重化された自己とのやり取りの合間に、共発話者であるガブリエルが参入する余地はないのだが、この閉ざされた自己との一連の対話はまさにガブリエルとの対話の真只中で現れ、目の前にいるガブリエルの存在を意識したものなのである.このような他者の存在を意識した仮想的な対話関係の構築操作について、類似例を次に見たい.

2-2. 対話空間の外の者に対する呼称表現

次に挙げる二つの例のように、目の前の共発話者との会話の中で発話者が実際にはその場にいない対話空間の外にいる者と仮想的な対話関係を構築するケースもある. (4)の事例はカフェの少し離れた席で大きな声で話している男について、発話者が隣にいる友人に愚痴をこぼすものである. ここで « mon gars » は離れた席にいる騒がしい男性を指している. 類似した事例として、(5)は、発話者が所属している太鼓クラブの講師が発話者に対して意地悪な発言をしたと

いう話の中で現れた発話であり、 «mon gars» は話題の人物である講師を指す.

- (4) Putain écoute mon gars, tu parles un peu fort quoi.
- (5) Et le prof dit que si je peux y arriver, c'est qu'il n'y aura pas de problème pour le reste du groupe. Mais *mon gars*, *tu* dis quoi ? C'est méchant !

«Mon gars»は直訳すれば、「私の青年、男、奴」といった意味であり、«Bonjour、mon gars!»といったように親愛の呼称として用いられる表現である。よって、(4)や(5)のような状況で、知り合いでもなく、かつ、発話が聞こえない程遠くにいる人物、ましてや、その場に存在しない話題の人物に使用するのは一見奇妙に思われる。しかし、このような用法は若者の会話の中でよく耳にするものであり、won gars »以外にも wec »、weuf »といった言葉も使われる。そして、その後に続く発話は二人称詞 wtu »で為されるのが普通である。

この種の発話は怒りや不満といった態度を示す場面で使用されることが多く,独り言の場合と同様に、発話者は自身の高まった感情を対話関係の疑似的な構築によって、放出させているといえる.しかし、これらの発話は発話者が怒りや不満を向けている相手にはそもそも伝達されるはずのないものであり、そのことを発話者自身も了解しているため、結果的に発話は発話現場に立ち会っている共発話者とのコミュニケーションを目的としているのである.

2-3. 仮想的な対話関係の構築が意図するコミュニケーション

ここまで、本来であれば対話関係が存在しないところに、発話者が仮想的な対話関係を構築する事例をみてきた。生きた対話の場を構築するという行為は、発話者の感情の高まりがトリガーとなっていることは間違いないだろう。しかし、同時に本稿で強調したいのは、これらの仮想的な対話関係の構築操作が発話者個人の感情の発散を単に目的とした閉ざされたものでは決してなく、対外的な性質も孕んでいるということであり、更に、発話者は仮想的な対話関係の構築という操作を一種のコミュニケーション・ストラテジーとして使用しているということである。では、仮想的な対話関係の構築が狙うコミュニケーション上の効果とは具体的には何であろうか。

2-3-1. 劇的効果

まず、はじめに、これらの仮想的な対話関係を構築するという操作は、いわば 生きた対話の場を共発話者の前で再現する一種の「演技」のようなものであり、 このパフォーマンスには、共発話者の注目を惹きつける効果があると考えられ る.これは冒頭で見たように、フランス語において、一人称と二人称が特定の個 人に結びつき、実際の発話現場を想起させる「真の人称」であるからこそ、可能となる劇的な効果であり、共発話者はここで発話現場を仮構したある種の演技を目の当たりにすることになる. そのため、発話者の高まった感情(怒りや焦り、自責など)が共発話者に臨場感を伴って、より効果的に伝達されるのではないかと考えられる.

2-3-2. 一人称の優越性の利用

1章で確認したように、本来の対話は一人称と二人称が交互に入れ替わることで成り立っている.しかし、これらの発話者が構築する仮想的な対話においては、仮想的な共発話者は想定されているものの、二重化された自己もしくはその場に存在しない第三者のように応答不可能な存在であり、人称の入れ替わりは生じない、あくまで仮想的なものである.つまり、ここでは、発話者が常に一人称(Benveniste の用語を使用すれば、「主体的人称」)であり、仮想的な共発話者にとって超越的な存在であり続けるのである.

この超越性とは何を意味するのか. (3)を例に考察したい. Monica の発話において,「可哀そうな私」と「それを憐れみ叱咤する私」とに主体が分裂していると述べたが,ここで発話権を握っている後者の「私」は,前者の二人称として指示される「私」に対して超越的な存在ということになる. それゆえ,発話者は,より理性的な「私」が感情的に行動してしまった「私」をコントロールしているという構造を共発話者である Gabriel に訴えることができるのである. つまり,一人称の超越性を利用することで, 仮想的な対話関係の構築操作は自己弁護としても有効に働くのである.

また, (4)(5)の事例に関しては、これらの発話は発話者が実際に発したい(発したかった)が実際には相手との関係性や状況、もしくは心情的な理由で発することのできなかった発話であるということに着目したい。ここでも怒りや不満を抱いている対象を仮想的な対話相手として設定することで、発話者は自己を優位な立場に置くことができるのである。これは目の前の対話相手に対して自己の正当性を示す効果を持ちうるほか、発話者の実際には叶わない(叶わなかった)強気な態度を実際の共発話者に示す効果も併せ持っていると推察される。

上記の二つの効果は、仮想的な対話関係を構築することで生まれるものであり、いずれも発話者自身の心的態度を伝達するための有効なストラテジーとして機能していると考えられる。つまり、これらは一見、発話としての方向性を失った仮想対話のようにみえるが、実は対他的性質を持っているのはもちろん、コミュニケーションにおいては、この形態をとるからこそ発話者が狙う特定の効果が発揮されるといえるのではないだろうか。

3. 既存の対話関係の解体

3章では、本来、発話者と共発話者の間に存在する既存の対話関係を解体して しまう事例をみていきたい.

3-1. 二人称詞から他の人称詞への人称転換

ここで考えたいのは、共発話者に二人称詞を使用せず、他の人称詞を使用するケースである。共発話者に二人称詞を使用する代わりに三人称詞を例外的に使用できることは、Benvenisteも指摘しており、「非人称」とされる三人称を共発話者に使用する操作は、一人称と二人称の人称圏から共発話者を追いやることを意味し、これが共発話者を通常の日常的な人間対人間の関係以上のものに持ち上げる「尊敬」表現ともなれば、逆に共発話者としての立場を無化する「侮辱」表現ともなると述べられている4.

このような本来使うべき人称詞の代わりに他の人称詞を使用する現象は「人称転換」、「人称代名詞の転用」、「反転人称」などとも呼ばれ、Cressot (1943)、Maingneau (1981)、青木 (1989)、田口 (1992)などの先行研究があり、上に挙げた三人称詞以外にも二人称詞の代わりに «je»、«on»、«nous» などが使用されることが報告されている。下記に具体的な事例を示しながら、人称転換のメカニズムを概観したい。Benveniste が指摘する三人称詞の場合と同様に、基本的な原理は、対話相手である共発話者に二人称詞を与えないことで、共発話者を人称圏から追いやることであるが、発話者と共発話者との関係性によっては、異なる効果を生み出すこともある。

Maingneau (1981)では、(6)-(10)の事例が挙げられており、赤ん坊やペットのように発話者にとって親密な相手でありながらも、物理的に対話が不可能な共発話者に対して、二人称詞を使用しない発話がなされるほか、(9)(10)のように、医者と患者、雇用者と被雇用者といった社会的立場が対等ではない二者間においても同様の現象が確認されると述べられている。

- (6) J'ai de beaux yeux, moi, comme j'ai l'air sage!
- (7) Nous sommes si gentils!
- (8) Il a de beaux poils, ce toutou-là!
- (9) Nous allons mieux aujourd'hui?
- (10) Nous sommes en retard?

Maingneau (1981 : 18)

田口(1992:4)では、このような人称詞の例外的な使用は一種の親愛表現で

⁴ Cf. Benveniste 1966: p.231.

あると指摘されており、本来、対話相手に使うべき二人称詞 «tu» を使うことで、あらわになってしまう一人称と二人称の間にある避け難い対立関係が、人称 転換によって回避され、親愛の効果が生まれると述べられている.

また、日常的なフランス語の会話を観察すると、幼児やペットに対する発話以上に、友人や親子間といった社会的な立場が対等な二者間において、このような人称詞の例外的な使用が確認できる。具体的な事例を下記に示す。(11)は慣用表現としてもよく知られているものであり、「お前なんかに関係ない!」といった発話者に対する敵対的な態度を示す発話である。(12)は、みんなで飲むために買っておいた酒をすべて一人で飲んでしまった友人に対しての皮肉であり、日本語に訳出すれば「シャルトリューズがお気に召したようだね!」といった発話である。続く(13)は前日の飲み会でぐったりしている息子に対して母親が皮肉を込めて発したものである。また、(14)はサルトルの『自由への道』からの引用であり、ダニエルが青年を馬鹿にして「なぁ、こんなふうに女みたいな陰険な足蹴りをするのか。」(海老坂武、澤田直訳)と発したものである。

(11) De quoi *je* me mêle ? Chacun son cul!

"Dix pour cent", Saison 3 Episode 2, Netflix.

- (12) Je l'ai bien aimée la chartreuse!
- (13) Bah alors, on s'est amusé bien hier soir?
- (14) Alors? On donne des coups de pied en vache comme une femme? Sartre, Les Chemins de la Liberté —La mort dans l'âme— (1969: 122)

これらは、三人称詞の使用に関する Benveniste の指摘でみたように、共発話者に対話相手としての指標を与えず、共発話者の立場を無化する「侮辱」表現に属すると考えられるが、表明される発話者の態度は多様であり、共発話者に対する強い軽蔑を示すものから、単に皮肉やからかいを示すもの、またはそれらによって共発話者との心理的距離の近さを示すものと多岐にわたる. つまり、伝達される発話者の心的態度は単純に二分できるものではなく、発話者と共発話者の関係性や発話状況によって多様に変化すると考えられる. また、使用する人称詞からの影響も受けるということも重要ではあるが、本稿では、各人称詞の使用の個別的な考察までは踏み込まず、「共発話者に二人称詞以外の人称詞を使用し、対話関係を解体する操作」に焦点を当てて考えたいが. 二人称詞を与えずに、あえて対話関係を解体するかのようなこの種のコミュニケー

38

⁵ 牧(2019)では、二人称詞の代わりに «je», «on» が使用される人称転換文について、両人称転換が起こる発話状況や転換によって表れる効果が異なることを指摘した。

ションは一体何を目指したものなのだろうか.

3-2. 既存の対話関係の解体が意図するコミュニケーション

これらの発話の特徴は、Cressot (1943:255) で指摘されているように、本来使われるべき人称詞の代わりに別の人称詞を用いるという «infraction à la logique 論理違反» によって情的なニュアンスが生まれているということである. ここでいう情的なニュアンスとは先に挙げた事例でみられたような親愛・皮肉・からかいといった発話者の共発話者に対する心的態度である.

つまり、人称転換文においては、叙述内容の伝達以上に、発話者の心的態度の 伝達が優先されているのである。したがって、これらの発話はたとえ疑問文の形 式をとっていても相手から何かしらの情報を引き出すことを目的としておらず、 発話者は共発話者の返答を待っていないのである。幼児やペットのような物理 的に返答が不可能な共発話者に対する発話はもちろん、例えば、(12)の発話にお いても発話者である母親は共発話者である息子が飲み会を楽しんだかどうかを 問題としていないのは明白である。

このような類の発話はなにも人称転換に限定されるものではなく、様々な形態をもって現れる. 友人の馬鹿げた発言に対する «Tu dis quoi? おまえ何言ってんだ?» や、昼過ぎにようやく起きてきた息子に対する «Tu penses qu'il est quelle heure? 今何時だと思ってるの?»といった発話が文字通りの意味を問うているのではなく、発話者の怒りや不満、呆れといった心的態度を伝達することは言うまでもない. このように、具体的叙述内容とは異なる意味を表明する言語表現は様々な形態で多種多様に存在するものの、ここで扱う人称転換発話のように、もとより発話者の心的態度の介入を許す形態をとっている言語表現が存在すると考えられる.

これに関連する先行研究として、矛盾文・同形反復文における発話者の主観性を考察した阿部 (2019) が挙げられる。ここでは、「こんなロボットはもうロボットじゃない!」のような $X \neq X$ であることを述べる矛盾文や「ネコはネコだ」のような X = X であることを述べる同語反復文は不条理で、もしくは自明すぎて、情報価値がない文となっており、「情報価値の欠如が発話者の主観性の介入を促す」という興味深い指摘がなされている。

二人称詞を失った人称転換文は、いわば発話の方向性を担う二人称情報を失った発話であり、阿部が取り上げている矛盾文や同語反復文と同様に「情報が欠如した本来では成立し得ないはずの発話」である。しかし、それゆえ、伝達内容の決定は個別的な発話状況に依存しており、発話者の主観性の介入が許されるという同じ原理が働いているのではないだろうか。つまり、共発話者はこの作為的な人称操作に情報とは性質の異なる発話者の心的態度なるものを感知するのである。しかし、万が一、共発話者がこれを感知しなくては心的態度の伝達が叶

わないため、共発話者が自身に向けられた発話であると認識できるように、疑問 形態や «alors» などの間投詞をはじめとする、相手への注意喚起の機能をもつ 言語要素を使用することで、方向性を失った発話を共発話者へ向かうよう補填 していると考えられる.

つまり、ここでみた対話関係を解体するコミュニケーションとは、発話を相互 的な情報交換を志向する対話的なものから、ただ発話者の心的態度を伝達する 装置に変換させることであり、あえて人称を逸脱的に使用することが、発話者の 心的態度を効果的に伝達するストラテジーとして作用しているのである.

4. 結論

発話主体が自己を一人称詞で指示し、共発話者を二人称詞で指示し、両人称詞が交互に入れ替わる現象は、我々が日常的に行う言葉のやりとりであり、対話である.しかし、実際の日常会話を観察すると、必ずしもこれに該当しない場合が多々存在するということを具体的な事例とともに指摘してきた.ここまでの考察を総括して、重要なことは以下の三つである.

まず一つは、人称表現の逸脱的な使用は、あくまで冒頭にあげた Benveniste の人称の基本構造に基づき、むしろこれを積極的に利用しているということである。フランス語においては人称と発話者の主体性が密接に結びついており、Bneveniste が指摘するように、一・二人称と三人称の間に「人称の相関関係」が,更に一人称と二人称の間には「主体性の相関関係」が存在し、これらの二重の相関構造でもって三つの人称が構成されているという前提があるからこそ、逸脱的な使用が効果を生むのである。

次に,人称と発話者の主体性が結びついているということは,つまり,発話者による対話関係の構築・解体操作は,発話者の主体性の表明に直接的に結びついているということである.発話者の主体性とは,発話者の心的態度とも換言でき,人称表現の意図的な変更操作は発話者の心的態度を間接的に表明する一つの指標となっているといえる.

最後に提言したいのは、フランス語話者は人称表現を時に逸脱的に使用し、共発話者との関係を変更することで、自身の心的態度をより効果的に伝達しているということである。例えば、本稿で挙げたフランス語の事例を日本語に訳出し、類似した効果を示すことは可能である。しかし、その場合、人称ではない表現方法に頼ることになろう。つまり、心的態度の伝達方法は各言語で異なり多様であるが、フランス語の場合は、人称表現が発話者の心的態度を伝達するストラテジーの一つとして有効に働いていると考えられるのである。

(東京国際大学)

参考文献

- 青木三郎 (1989)「人称に関する日・仏対照言語学研究」,『文芸・言語研究 (言語篇)』, 第 16 号, pp. 1-44, 筑波大学.
- 阿部宏 (2019)「矛盾文と「望ましさ」主観性について」,澤田治美・仁田義雄・山梨正明編・著『場面と主体性・主観性』,pp. 271-294, ひつじ書房.
- 鈴木孝夫(1987)『わたしの言語学』,大修館書店.
- 田口紀子 (1992)「フランス語の人称代名詞の転用」,『仏文研究』, 第 23 号, pp. 1-10, 京都大学文学部フランス語学フランス文学研究室.
- 長谷川葉子 (2017) 「三層モデルによる独り言の分析」,廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子編・著『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』,pp. 26-43,開拓社.
- 牧彩花 (2018)「人称の転換に関する人称の日仏対照研究— «on» と「人」を中心に—」,『フランス文学研究』, 第 38 号, pp. 23-36, 東北大学フランス語フランス文学会.
- 牧彩花 (2019)「フランス語の人称転換—二人称詞から «je», «on» へ—」, 『フランス文学研究』, 第 39 号, pp. 11-22, 東北大学フランス語フランス文学会.
- メイナード・泉子・K(2000)『情意の言語学—「場交渉論」と日本語表現のパトス一』, くろしお出版.
- BENVENISTE, É. (1966a) *Problèmes de linguistique générale*, t. 1, Gallimard. (エミール・バンヴェニスト, 1983 (新装版 2007). 『一般言語学の諸問題』,岸本通夫監訳,みすず書房).
- BENVENISTE, É. (1966b) *Problèmes de linguistique générale*, t. 2, Gallimard. (エミール・バンヴェニスト, 2013, 『言葉と主体性――般言語学の諸問題―』, 阿部宏監訳, 岩波書店).
- CRESSOT, M. (1943) « Transposition de personne et impersonnalisation », Le Français moderne, nº 11, pp. 255-262, Éditions d'Artrey.
- CRESSOT, M. LAURENCE, J. (1996) Le Style et ses Techniques, Presses Universitaires de France.
- DHORNE, F. (2015) « Je monte, je valide ou l'énonciateur-fantôme », 『フランス語学研究』, 49 号, pp. 65-85, 日本フランス語学会.
- GOFFMAN, E. (1978) « Response cries », *Language*, vol. 54, no. 4, pp. 787-815. [Reprinted in Forms of Talk, by Erving Goffman, 1981, 78-123, University of Pennsylvania Press, Philadelphia.]
- HASEGAWA, Y. (2010) Soliloquy in Japanese and English, John Benjamins, Amsterdam.
- MAINGUENEAU, D. (1981) Approche de l'Énonciation en linguistique français,

Hachette Université.

MAINGUENEAU, D. (2007) *Analyser les textes de communication*, Armand Colin. (ドミニク・マグノー, 2012, 『コミュニケーションテクスト分析―フランス学派による言説分析への招待』, 石丸久美子訳, ひつじ書房).

例文出典

[文学作品]

SARTRE, J.-P. (1969) Les Chemins de la Liberté — La mort dans l'âme, Gallimard. (ジャン=ポール・サルトル, 2010, 『自由への道—魂の中の死』, 海老坂武, 澤田直訳 岩波文庫.)

[ドラマ]

« Dix pour cent (邦題:エージェント物語) »: Fanny Herrero, Dominique Besnehard 監督, 2015 年 10 月 14 日より France 2 で放送, Netflix で視聴可能 (2020 年 4 月 30 日閲覧).

[résumé]

Construire et déconstruire des relations de dialogue

-La fonction de l'expression personnelle dans la communication-

Notre communication quotidienne est fondée sur un dialogue mutuel dans lequel le locuteur et l'interlocuteur échangent les rôles de chacun en utilisant « je » et « tu » alternativement. Cependant, dans la conversation de tous les jours en français, cette « relation de dialogue » apparaît parfois d'une manière différente. Dans cet article, nous avons examiné comment la relation entre le locuteur et l'interlocuteur, qui s'écarte du dialogue habituel, fonctionne dans la communication actuelle.

Dans la première moitié, nous avons considéré le cas dans lequel le locuteur qui parle seul utilise une expression à la deuxième personne pour parler de lui-même et construire une relation de dialogue virtuel. Ces opérations apparaissent aussi dans le monologue ou l'énonciation lors d'un reproche à une troisième personne. Cette forme de dialogue fermé met l'interlocuteur hors de l'espace de dialogue et, de fait, cela permet au locuteur de transmettre des émotions de manière plus marquée.

Dans la seconde moitié, nous avons envisagé l'opération de déconstruction du dialogue découlant de la non-utilisation de « tu » pour désigner son interlocuteur. Dans cette opération, le locuteur annule la relation mutuelle existante et construit une nouvelle relation en utilisant les pronoms personnels autre que « tu », c'est-à-dire « je », « on » et « nous ». Cette modification a pour effet de transmettre indirectement l'attitude du locuteur.

Ainsi, nous avons considéré l'utilisation exceptionnelle des expressions personnelles en termes de construction et déconstruction des relations de dialogues. Ces opérations sur les pronoms personnels utilisés par le locuteur sont fondées sur et profitent de la structure « classique » de la désignation des personnes en français, soulignée par Benveniste (1966). En français, l'expression personnelle est un indicateur du changement relationnel et émotionnel du locuteur et fonctionne comme une sorte de stratégie de communication pour transmettre l'attitude mentale du locuteur.

Ayaka MAKI Université internationale de Tokyo

編集後記

日本フランス語フランス文学会東北支部会誌第13号をお届け致します. 今号の内容は,2019年11月30日に東北大学の主催によって開催された東北支部大会にもとづいております. それから半年ばかりの間に,Covid-19の世界的な感染拡大のため,われわれの慣れ親しんだ世界が根底から揺さぶられ変貌しつつある感があります. まだ日常生活の基盤をどこに置き直すべきなのか各方面で暗中模索の最中ですが,かえって普段通りの学術活動を継続できることの意義と喜びを感じるこの頃です.

執筆者のみなさまには、新年度からのWebによる遠隔授業への切り替えに忙殺されている最中に度重なる校正作業をしていただき、ありがとうございました。また、その他の関係者のみなさまのご尽力に御礼申し上げます。

会員のみなさま、また、このHP版をご覧いただきましたみなさまには、引き続き本 誌へのご支援、ご協力を賜わりますよう、心よりお願い申し上げます. (N.T.)

投稿規定

- 1. 日本フランス語フランス文学会東北支部会員は、この雑誌に投稿することができる. 他に、編集委員会が認めた場合は会員以外からの投稿も受理する場合がある.
- 2. 投稿希望者は、原則として東北支部大会で口頭発表の後、これをもとにした原稿を投稿するものとする。ただし、編集委員会が認めた場合は研究発表を経ない原稿の投稿も受理する場合がある。
- 3. 投稿希望者は、事前に支部事務局に連絡し、執筆要項を受領し、それに沿って原稿を作成する.
- 4. 講演原稿,シンポジウム報告,書評など,論文以外の投稿も受け付ける.
- 5. 使用言語は、日本語もしくはフランス語とする.
- 6. 論文の分量は、本文、注を含めて日本語の場合は 16,000 字以内、フランス語の場合は、A4 版 15 枚 (4,800 語) 以内を原則とする. 他のジャンルの分量については、編集委員会に事前に問い合わせられたい.
- 7. 投稿原稿は、Microsoft Word 形式の添付ファイルで支部事務局に送る. 締め切りは、支部大会の翌年の1月末とする.
- 8. 原稿の採否、掲載時期は、査読を経て編集委員会が決定する.
- 9. 雑誌は、日本フランス語フランス文学会東北支部会ホームページ上での刊行を原則とするが、適宜冊子体での刊行も行う.
- 10. 冊子体での刊行においては、原稿執筆者に本体 10部、また抜き刷り 30部を贈呈する.

(2010年11月13日開催の支部総会にて一部改訂)



Bulletin de la Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises du Tohoku, nº 13

日本フランス語フランス文学会東北支部会報 第13号

编集责任者/寺本成彦

编集委員/熊本哲也, 今田陽祐, 辻野稔哉, 深井陽介

2020年6月12日癸行

癸行者/日本フランス語フランス文学会東北支部

http://genesis.hss.iwate-u.ac.jp/sjllf-tohoku/

支部事務局への向い合わせ等は、上記ホームページの「ご意見&ご要望」ページをご利用 ください。

仙台日仏協会・アリアンス・フランセーズ

さまざまなレベルに対応した安心・丁寧なフランス語講座、 フランス語を楽しめる文化イベント、各種翻訳・通訳や フランス語試験を「東北のフランス」として展開しています。







仙台日仏協会・アリアンス・フランセーズ

〒980-0014 仙台市青葉区本町2-8-10 4·5F TEL 022-225-1475 http://afsendai.com contact@afsendai.com